

第32回 韓日・日韓經濟人會議

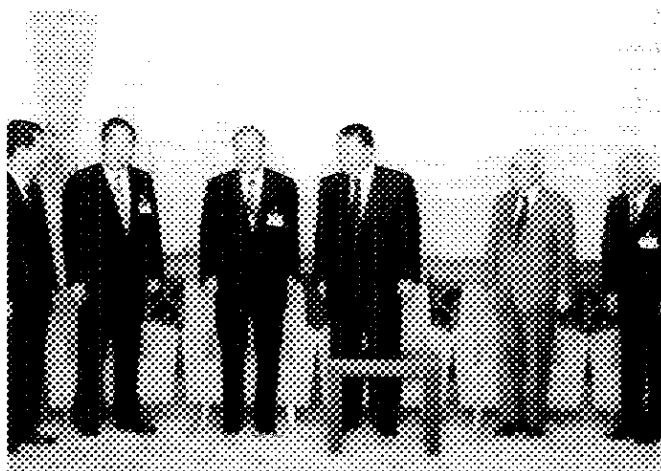
THE 32ND KOREA-JAPAN & JAPAN-KOREA
BUSINESS CONFERENCE

2000. 6. 1 ~ 3 TOKYO, JAPAN

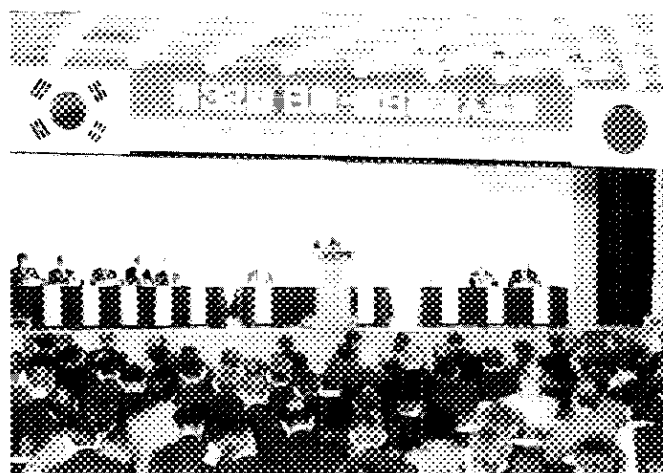
報 告 書

(社)韓日經濟協會

第32回 韓日・日韓經濟人會議



總理大臣을 禮訪하고 있는 團長團



開 會 式



開會人事하는 金相廈 韓國側 團長



韓國側 顧問團과 來賓



分科會 進行모습



會議를 마치고 記者會見하는 兩側 團長

目 次

1. 共同聲明	5
2. 目 程	9
3. 議 題	13
4. 兩側 代表團 名單	15
5. 開會式	
(1) 團長人事	35
藤村 正哉 日本側 代表團 團長	35
金 相 廈 韓國側 代表團 團長	38
(2) 來賓祝辭	40
中曾根康弘 日韓協力委員會 會長	40
崔 相 龍 駐日大韓民國特命全權大使	44
(3) 顧問人事	47
室伏 稔 前(社)日本貿易會 會長	47
金 在 哲 (社)韓國貿易協會 會長	50

6. 基調演說

- (1) 日本側 基調演說 55
『日韓 兩國을 둘러싼 環境變化와 새로운 協力關係의 摸索을 위하여』
今井 敬 (社)經濟團體連合會 會長, 新日本製鐵(株) 會長
- (2) 韓國側 基調演說 61
『새천년 아시아 經濟비전을 위한 韓日經濟人 構想』
金 珥 中 全國經濟人聯合會 會長, (株)京紡 會長

7. 全體會議 ①

- (1) 一般經過報告(書面) 71
- (2) 韓日産業貿易會議 報告 75
秋山 富一 日本側 代表
- (3) 韓日中堅中小企業委員會 報告 79
菅野 利德 日本側 委員長
- (4) 韓日中堅經濟人交流促進團 報告 82
薛 元 鳳 韓國側 團長

8. 第 1 分科會

- (1) 日本側 백그라운드 페이퍼 89
『日韓 Business alliance의 展望과 課題』
椎野 謙次 (株)野村綜合研究所 主席研究員
- (2) 韓國側 백그라운드 페이퍼 97
『Internet을 活用한 韓日 兩國 企業間 協力』
李 容 璟 韓國通信FREETEL(株) 社長
- (3) 韓日 兩側 백그라운드 페이퍼에 대한 自由討論 106

9. 第 2 分科會

- (1) 韓國側 백그라운드 페이퍼 137
『뉴라운드時代에 있어서의 環境協力
：韓日 兩國의 産業部門 環境協力 方案』
任 東 淳 産業研究院 産業政策研究中心 首席研究員
- (2) 日本側 백그라운드 페이퍼 154
『環境政策 實現을 위한 社會基盤 整備
－ 環境經營 推進 및 持續的인 經濟發展을 위하여－』
勝田 悟 (株)第一勸銀綜合研究所 研究開發本部 特別研究員
- (3) 韓日 兩側 백그라운드 페이퍼에 대한 自由討論 163

10. 合同分科會

- (1) 主題發表 187
- ① 『「隣交」의 促進과 日韓 交流의 役割』 187
山本 正 (財)日本國際交流센터 理事長, 日韓포럼 代表幹事
- ② 『韓・日 貿易不均衡의 根本原因과 對策』 191
趙 煥 益 産業資源部 貿易投資室長
- ③ 『日韓 海峽交流의 現狀과 展望』 202
石井 幸孝 九州旅客鐵道(株) 會長, 日韓親善協會 九州沖繩ブロック長
- ④ 『서둘러야 할 韓日 地域間 交流』 207
李 吉 鉉 三星・HOTEL新羅 相談役
- (2) 特別講演 215
『21世紀의 바람직한 韓日 經濟關係』
山澤 逸平 日本貿易振興會 아시아經濟研究所 所長

(3) 共同提案	222
----------	-----

『日韓中堅經濟人交流促進團 派遣, 青少年交流日韓大學生 相互訪問,
韓國訪日輸出促進團・産業技術交流促進mission 誘致』

井野 正義 (社)日韓經濟協會 常務理事

11. 全體會議 ②

(1) 第 1 分科會 報告	227
----------------	-----

① 日本側 코디네이터	227
-------------	-----

麻生 泰 麻生시멘트(株) 社長

② 韓國側 코디네이터	229
-------------	-----

金 正 (株)HANWHA流通 代表理事

(2) 第 2 分科會 報告	231
----------------	-----

① 日本側 코디네이터	231
-------------	-----

大慈彌省三 石川島播磨重工業(株) 副社長

② 韓國側 코디네이터	234
-------------	-----

金 熙 勇 東洋物産企業(株) 副會長

12. 閉會式

(1) 團長人事	239
----------	-----

藤村 正哉 日本側 代表團 團長	239
------------------	-----

金 相 廈 韓國側 代表團 團長	241
------------------	-----

共 同 聲 明

第32回 韓日・日韓經濟人會議는 2000年 6月 1日, 2日의 兩日間 日本國 東京都에서 韓國側에서는 金相廈 團長 外 148名이, 日本側에서는 藤村 正哉 團長 外 137名이 參席한 가운데 開催되었다.

1. 全體會議에서는 書面으로 一般經過報告, 貿易投資委員會・機械工業委員會・産業一般委員會의 세 專門委員會를 統合하여 새로 發足한 産業貿易會議 및 其他 會議의 活動狀況에 대한 報告가 있었으며 모두 異意 없이 報告를 마쳤다.

- (1) 第1回 韓日・日韓産業貿易會議 (1999年 10月, 日本・千葉)
- (2) 第10回 韓日・日韓中堅經濟人交流促進團 會議 (1999年 11月, 日本・福岡)
- (3) 第18回 韓日・日韓中堅中小企業委員會 會議 (2000年 3月, 韓國・서울)

2. 먼저 基調演說 등을 통해 兩國의 經濟人은 兩國經濟와 兩國關係에 대해 다음과 같은 事項에서 基本認識의 一致를 보았다.

日本經濟는 長期間의 景氣沈滯에 대해서 稅制・法制・經濟運營・企業經營等 다양한 分野에서, 官民 모두가 構造改革 努力을 持續해 온 結果, 이제 景氣回復의 움직임이 鮮明해지고 있다. 民需主導의 自律回復軌道로의 復歸를 確實히 하기 위해서는 무엇보다도 民間의 主體的 努力이 大前提가 되고, 企業은 지금이야말로 企業家 精神을 發揮하여 雇用을 擴大하고 經濟新生을 리드해 나가지 않으면 안된다.

韓國經濟는 97年 金融危機 以後, 金融機關의 統廢합을 비롯한 시스템改革, 企業經營의 改善과 透明性の 確保, 規制의 緩和・撤廢等 官民合同이 構造改革의 努力을 한 結果, 消費・投資・輸出이 急速히 回復되어 本格的인 回復軌道에 들어서고 있지만, 아직 남아있는 金融部門의 構造調整, 過剩設備等 根本的인 原因解決의 努力이 必要하다.

今年 6月 中旬으로 豫定된 歴史的인 南北頂上會談은 向後 日本과 中國을 包含한 東北아시아經濟圈의 展開에도 큰 影響을 미칠 것이다. 이 經濟圈안에서 보다 效率이 높은 分業構造를 追求하고 디지털・네트워크經濟時代에 걸맞는 새로운 協力方向을 摸索하는 것은 우리 經濟人의 目標이다.

東아시아地域의 連帶와 協力の 선봉이 될 수 있는 韓日自由貿易協定 構想이 將來 實現될 것을 상정해 投資協定交渉 等 그 基礎가 될 틀을 만들어가고 있는 兩國 政府의 努力이 結實을 맺을 수 있도록 實物經濟를 젊어지고 있는 兩國의 經濟人들도 協調와 努力을 하지 않으면 안된다.

兩國企業은 글로벌한 事業展開를 꾀하는데 있어, 보다 폭넓은 多國間關係 속에서 兩國關係를 摸索하며, 貿易과 投資의 擴大, 그리고 自由化의 促進, 部品·素材産業 育成의 支援 等 兩國間的 課題를 둘러싼 成果와 經驗을 살려가면서, 특히 東南아시아 各國의 經濟體質을 加一層 強化시키는데 率先해서 貢獻해 가지 않으면 안된다.

3. 各 分科會에서의 意見發表와 討論을 통해, 새로운 千年을 맞아 더욱 激變하는 世界經濟에 對應해야 할 兩國 經濟人들은 다음 事項에서 意見一致를 보았다.

(1) 兩國 固有의 文化를 서로 尊重하여 傳統과 價值觀의 差異에 대해서도, 이를 냉정히 認識한 後 보다 普遍的인 基準이나 틀과의 整合性 確保에 努力하지 않으면 안된다. 認識의 共有, 共通의 價值觀의 形成, 兩國의 오피니언리더들의 相互理解와 信賴關係의 造成은 直接投資나 새로운 business alliance의 擴大에도 필수적인 스텝이다.

(2) 인터넷의 發達, IT-eB(情報技術과 電子商去來)時代의 到來은 우리의 思考·制度·慣行·組織의 變革을 통해서 經濟, 社會, 文化 全般에 큰 變革을 가져왔으며, 豫測을 불허할 程度로 急速한 成長을 實現하고 있다. 向後 兩國 經濟成長의 KEY가 되는 것은 IT(情報技術)이고, 이것이 가져올 無限한 비즈니스 찬스를 兩國 企業이 더욱 活用해 나가기 위해서는 兩國의 社會全般에 걸친 信賴關係의 形成이 必要하다는 점을 우리는 共通으로 認識하고자 한다.

(3) 다시 增加勢로 돌아선 韓國의 對日 貿易赤字와 關聯하여, 그 對策으로서 전부터 實施되어온 韓國의 部品·素材生産部門, 즉 supporting industry와 그 實質적인 基盤이 되는 中小企業部門의 強化·育成策은 知識産業·소프트産業의 時代에 들어서도 여전히 가장 重要한 課題中の 하나이다.

韓日·日韓産業技術協力財團의 活動도 이미 8年제에 접어들어 産業人力育成事業, 生産性向上을 위한 現場指導事業 등을 活潑히 實施해오고 있으며, 韓國部品産業의 技術레벨과 競爭力의 向上에 크게 寄與하고 있다. 우리는

이러한 施策의 有效性을 檢證해 나가면서 重要項目에 대한 事業의 집중과 資金活用の 效率化를 더욱 圖謀해 나가야 할 것이다.

(4) 이번 會議에서 兩國 共通의 具體的 테마로써 地球次元에서의 對應을 必要로 하는 環境問題가 報告되어 兩國이 協調하여 東아시아地域의 環境保全에 對應할 必要가 있다는 것에 認識을 같이 하였다. 兩國은 蓄積된 經驗과 技術을 活用하여 競爭優位를 確保하면서 世界の 環境保全에 寄與할 수 있도록 努力하지 않으면 안된다.

(5) 兩國間의 地域間交流를 더욱 擴大하는 것은 經濟 및 文化交流를 加一層 活性化하고, 나아가서는 近隣 東北아시아地域의 經濟活性化와 모델經濟圈의 形成을 가능케 할 것이다.

4. 各 分科會에서의 提案 등에 관해 別添事項에 合意하였다.

5. 다음 會議는 來年 韓國에서 開催한다.

2000年 6月 2日

韓國側 代表團 團長 金 相 廈

日本側 代表團 團長 藤村正哉

〈別 添〉

合 意 事 項

- (1) 「産業貿易會議」開催에 協力하는 件
- (2) 「訪日輸出促進團」派遣과 그 受容에 協力하는 件
- (3) 兩國 「産業技術協力財團」事業에 協力하는 件
- (4) 「韓日中堅經濟人交流促進團」의 韓國 派遣과 그 受容에 協力하는 件
- (5) 「靑少年交流事業」으로서 韓日 兩國의 大學生을 相互派遣하고, 그 受容에 協力하는 件
- (6) 兩國 「페스티벌」事業에 協力하는 件
- (7) 其他 韓日・日韓 兩經濟協會 合意下에 推進하는 事業에 協力하는 件

以 上

日 程

6月 1日 (木)

- 09:20 - 11:35 金浦空港 - 成田空港 (KE 701)
- 12:30 - 14:00 成田空港 - HOTEL (BUS)
- 14:00 HOTEL CHECK IN (HOTEL OKURA)
- 15:00 - 15:40 開會式 ----- 別館 B2F 曙(AKEBONO) I,II
 (1) 開會
 (2) 兩側 團長人事
 韓國側：金 相 廈 團長
 日本側：藤村 正哉 團長
 (3) 來賓祝辭
 韓國側：崔 相 龍 駐日大韓民國特命全權大使
 日本側：中曾根康弘 日韓協力委員會 會長
 (4) 顧問人事
 韓國側：金 在 哲 (社)韓國貿易協會 會長
 日本側：室伏 稔 前(社)日本貿易會 會長
- 15:40 - 16:10 日本側 基調演說
 『日韓 兩國을 둘러싼 環境變化와 새로운 協力關係의 摸索을 위하여』
 今井 敬 (社)經濟團體連合會 會長, 新日本製鐵(株) 會長
- 16:10 - 16:30 COFFEE BREAK
- 16:30 - 17:00 韓國側 基調演說
 『새천년 아시아 經濟비전을 위한 韓日經濟人 構想』
 金 珏 中 全國經濟人聯合會 會長, (株)京紡 會長
- 17:00 - 17:30 全體會議 ①
 (1) 一般經過報告 (書面)
 (2) 韓日產業貿易會議 報告 秋山 富一 日本側 체어맨
 (3) 韓日中堅中小企業委員會 報告 菅野 利德 日本側 委員長
 (4) 韓日中堅經濟人交流促進團 報告 薛 元 鳳 韓國側 團長

18 : 00 - 19 : 30 RECEPTION (兩經濟協會 共同主催)
----- 別館 2F 桃山(MOMOYAMA)

19 : 30 - 22 : 00 NIGHT TOUR [隅田川(SMIDAGAWA) 遊覽船 觀光]

6月 2日 (金)

09 : 00 - 12 : 00 各分科會別 會議

- 第1分科會 (테마 : 새로운 韓日 協力)

----- 別館 B2F 曙(AKEBONO) II

코디네이터 韓國側 : 金 正 (株)HANWHA流通 代表理事

日本側 : 麻生 泰 麻生CEMENT(株) 社長

《第1分科會 細部日程》

09 : 00 - 09 : 10	兩側 코디네이터 分科會進行 說明 및 코멘트
09 : 10 - 09 : 30	日本側 백그라운드 페이퍼 要約發表
09 : 30 - 10 : 20	自由討論
10 : 20 - 10 : 40	COFFEE BREAK
10 : 40 - 11 : 00	韓國側 백그라운드 페이퍼 要約發表
11 : 00 - 11 : 50	自由討論
11 : 50 - 12 : 00	兩側 코디네이터 總括

- 第2分科會 (테마 : 韓日 共通課題「環境」)

----- 別館 B2F 曙(AKEBONO) I

코디네이터 韓國側 : 金 熙 勇 東洋物産企業(株) 副會長

日本側 : 大慈彌省三 石川島播磨重工業(株) 副社長

《第2分科會 細部日程》

09 : 00 - 09 : 10	兩側 코디네이터 分科會進行 說明 및 코멘트
09 : 10 - 09 : 30	韓國側 백그라운드 페이퍼 要約發表
09 : 30 - 09 : 50	日本側 백그라운드 페이퍼 要約發表
09 : 50 - 10 : 10	COFFEE BREAK
10 : 10 - 11 : 50	自由討論
11 : 50 - 12 : 00	兩側 코디네이터 總括

6月 3日(土)

* OPTION PROGRAM

(Ⅰ) 観光

09:00 - 09:15 HOTEL - 皇居 東御苑(KOUKYO HIGASHIGYOEN) (BUS)
09:15 - 10:15 皇居 東御苑(公園) 見學
10:15 - 11:00 BUS로 移動 (車內에서 臨海副都心 地區 見學)
11:00 - 팔렛(palette)타운 到着
비너스포트 內에서 中食 後 見學 (約 90分)
12:15 - 13:50 成田空港으로 移動 (BUS)
15:55 - 18:25 成田空港 - 金浦空港 (KE 002)

(Ⅱ) 特別行事

07:30 - 09:00 HOTEL - 立野(DATENO) Classic Golf Club (BUS)
09:47 - 16:30 親善交流活動 (GOLF)
16:30 - 18:30 立野(DATENO) Classic Golf Club - HOTEL (BUS)

※ 特別行事 參加者は 6月 4日(日) 歸國

12:40 - 15:10 成田空港 - 金浦空港 (KE 702)

(Ⅲ) OPTION PROGRAM 不參者

※ 歸國便

09:30 - 12:00 成田空港 - 金浦空港 (KE 706)
12:40 - 15:10 成田空港 - 金浦空港 (KE 702)
13:30 - 16:00 成田空港 - 金浦空港 (OZ 101)
14:30 - 17:00 成田空港 - 金浦空港 (KE 704)
15:55 - 18:25 成田空港 - 金浦空港 (KE 002)

議 題

1. 第 1 分科會 (테마 : 새로운 韓日 協力)

韓國側 : 『Internet을 活用了한 韓日 兩國 企業間 協力』

李 容 璟 韓國通信 FREETEL(株) 社長

日本側 : 『日韓 Business alliance의 展望과 課題』

椎野 謙次 (株)野村綜合研究所 主席研究員
(Shiino kenji)

2. 第 2 分科會 (테마 : 韓日 共通課題 「環境」)

韓國側 : 『뉴라운드時代에 있어서의 環境協力』

: 韓日 兩國의 産業部門 環境協力 方案』

任 東 淳 産業研究院 産業政策研究센터 首席研究員

日本側 : 『環境政策 實現을 위한 社會基盤 整備』

- 環境經營 推進 및 持續的인 經濟發展을 위하여 - 』

勝田 悟 (株)第一勸銀綜合研究所 研究開發本部 特別研究員
(Katsuta satoru)

3. 合同分科會

韓國側 : 『韓・日 貿易不均衡의 根本原因과 對策』

趙 煥 益 産業資源部 貿易投資室長

『서둘러야할 韓日 地域間 交流』

李 吉 鉉 三星・HOTEL新羅 相談役

日本側：『「隣交」의 促進과 日韓 交流의 役割』

山本 正 (財)日本國際交流센터 理事長
(Yamamoto tadashi)
日韓포럼 代表幹事

『日韓 海峽交流의 現狀과 展望』

石井 幸孝 九州旅客鐵道(株) 會長
(Ishii yoshitaka)
日韓親善協會 九州沖繩支部長

〈共同提案〉

『日韓中堅經濟人交流促進團 派遣, 青少年交流日韓大學生 相互訪問,
韓國訪日輸出促進團・産業技術交流促進mission 誘致』

井野 正義 (社)日韓經濟協會 常務理事
(Ino masayoshi)

韓國側 代表團 名單

順：職 責 順

區 分	姓 名			團 體 會社職位	團 體 / 會 社 名
團 長	金 KIM	相 SANG	廈 HA	會 長 會 長	(社)韓日經濟協會 (株)三養社
顧 問	朴 PARK	容 YONG	晟 SUNG	顧 問 會 長	(社)韓日經濟協會 大韓商工會議所
“	金 KIM	珏 KAK	中 CHOONG	顧 問 會 長	(社)韓日經濟協會 全國經濟人聯合會
“	金 KIM	在 JAE	哲 CHUL	顧 問 會 長	(社)韓日經濟協會 (社)韓國貿易協會
“	朴 PARK	相 SANG	熙 HEE	顧 問 會 長	(社)韓日經濟協會 中小企業協同組合中央會
副 團 長	金 KIM	昇 SEUNG	淵 YOUN	副 會 長 會 長	(社)韓日經濟協會 (株)HANWHA
“	金 KIM	熙 HI	勇 YONG	副 會 長 副 會 長	(社)韓日經濟協會 東洋物產企業(株)
“	羅 RA	應 EUNG	燦 CHAN	副 會 長 副 會 長	(社)韓日經濟協會 新韓銀行
“	朴 PARK	世 SEI	英 YOUNG	副 會 長 會 長	(社)韓日經濟協會 韓國PANTLAND(株)
“	徐 SUH	敏 MIN	錫 SOK	副 會 長 會 長	(社)韓日經濟協會 東一紡織(株)
“	薛 SULL	元 WON	鳳 BONG	副 會 長 會 長	(社)韓日經濟協會 大韓製糖(株)
“	梁 YANG	在 JAE	奉 BONG	副 會 長 會 長	(社)韓日經濟協會 大信GROUP
“	劉 YOO	常 SANG	夫 BOO	副 會 長 會 長	(社)韓日經濟協會 浦項綜合製鐵(株)
“	趙 CHO	錫 SUCK	來 RAI	副 會 長 會 長	(社)韓日經濟協會 (株)曉星

區 分	姓 名			團 體 會社職位	團 體 / 會 社 名
副 團 長	崔 CHOI	用 YONG	權 KWON	副 會 長	(社)韓日經濟協會 三煥企業(株)
特別參加	姜 KANG	信 SHIN	浩 HO	會 長	東亞製藥(株)
“	姜 KANG	晉 JIN	求 KU	理 事 會 長	(財)韓日産業・技術協力財團 三星電機(株)
“	朴 PARK	承 SEUNG	復 BOK	會 長	샘표食品(株)
“	李 LEE	春 CHOON	林 LIM	理 事 常任顧問	(財)韓日産業・技術協力財團 現代綜合商事
“	李 LEE	吉 GIL	鉉 HYUN	相 談 役	(株)HOTEL新羅
“	趙 CHO	煥 HWAN	益 EIK	貿易投資室長	産業資源部
團 員	郭 KWAK	一 IL	薰 HOON	會 長	A-1 COMMUNICATION INC. CASTING MAIL.COM
“	金 KIM	德 DUK	吉 KIL	會 長	大永産業開發(株)
“	金 KIM	昌 CHANG	震 JIN	會 長	安養商工會議所
“	金 KIM	昊 HO	淵 YOUN	會 長	(株)빙그레
“	朴 PARK	京 KYOUNG	惠 HYE	會 長	EXING
“	辛 SHIN	東 DONG	烈 YEOL	會 長	成門電子(株)
“	申 SHIN	受 SOO	娟 YON	會 長	韓國女性經濟人協會
“	李 LEE	炳 BYUNG	均 KYUN	會 長	安城商工會議所
“	李 LEE	秉 BYUNG	星 SUNG	會 長	龍仁商工會議所

區 分	姓 名			團 體 會社職位	團 體 / 會 社 名
團 員	李 LEE	長 JANG	熙 HEE	會 長	平澤商工會議所
“	林 LIM	都 DO	洙 SOO	會 長	安山商工會議所
“	尹 YOON	鳳 BONG	秀 SOO	會 長	(株)南盛
“	蔣 CHANG	慶 KYUNG	煥 HWAN	會 長	POSCO經營研究所
“	趙 CHO	時 SI	永 YOUNG	會 長	始興商工會議所
“	蔡 CHAE	載 JAE	億 UK	會 長	韓國生產性本部
“	韓 HAN	相 SANG	旭 WOOK	會 長	華城商工會議所
“	韓 HAN	鍾 CHONG	瑞 SUH	會 長	(株)大斗
“	曹 CHO	圭 KYU	河 HA	理 事 長	韓國科學文化財團
“	孫 SOHN	炳 BYUNG	斗 DOO	常勤副會長	全國經濟人聯合會
“	趙 CHO	在 JAE	哲 CHEOL	副 會 長	(株)世亞製鋼
“	崔 CHOI	明 MYUNG	煥 HWAN	副 會 長	興和工業(株)
“	金 KIM	立 IP	三 SAM	常任顧問	全國經濟人聯合會
“	金 KIM	英 YOUNG	泰 TAI	顧 問	東洋物産企業(株)
“	李 LEE	基 KI	式 SIK	顧 問	AZTEC SYSTEMS INC.
“	李 LEE	奉 BONG	國 KOOK	顧 問	東洋物産企業(株)

區 分	姓 名			團 體 會社職位	團 體 / 會 社 名
團 員	周 CHUH	永 YOUNG	爽 SOUK	相 談 役	法務法人 世宗
“	盧 NOH	泳 YOUNG	旭 WOOK	院 長	自動車部品研究院
“	左 JWA	承 SUNG	喜 HEE	院 長	韓國經濟研究院
“	金 KIM	自 JA	浩 HO	代表理事	(株)間・三綜合建築事務所
“	金 KIM		正 JUNG	代表理事	(株)HANWHA流通
“	盧 ROH	裕 YOU	羅 RA	代表理事	NOI
“	徐 SUH	鍾 CHONG	錫 SUK	代表理事	(株)ORIENTAL精工
“	安 AHN	宗 CHONG	原 WON	代表理事	(株)雙龍
“	廉 YUM	正 JUNG	泰 TAE	代表理事	雙龍情報通信
“	奇 KEE	秉 BYUNG	泰 TAE	社 長	大韓空調(株)
“	朴 PARK	鍾 CHONG	憲 HUN	社 長	(株)三養GENEX
“	李 LEE	東 DONG	赫 HYUK	社 長	高麗海運(株)
“	李 LEE	永 YOUNG	雨 WOO	社 長	(株)大斗
“	李 LEE	容 YONG	璟 KYUNG	社 長	韓國通信FREETEL
“	申 SHIN	德 DUCK	鉉 HYUN	專務理事	(社)韓日經濟協會
“	全 JUN	茂 MOO	雄 WOONG	專務理事	興和工業(株)

區 分	姓 名			團 體 會社職位	團 體 / 會 社 名
團 員	孫 SON	仲 SHIN	明 MYUNG	理 事	(株)豊山
“	金 KIM	善 SUN	祐 WOO	監 事	SEOUL言論財團
“	任 LIM	東 DONG	淳 SOON	首席研究員	産業研究院 産業政策研究CENTER
“	金 KIM	都 DO	亨 HYUNG	所 長	産業研究院
“	李 RHEE	鐘 CHONG	允 YUN	教 授	韓國外國語大學校
“	金 K.M	大 DAI	郁 WOOK	社 長 會 長	(株)雙龍JAPAN 駐日韓國企業連合會
“	洪 HONG	重 JOONG	和 HWA	本 部 長 副 會 長	(株)韓進海運 東京支店 駐日韓國企業連合會
“	韓 HAN	光 KWANG	熙 HEE	常務理事 副 會 長	浦項綜合製鐵(株) 東京支店 駐日韓國企業連合會
“	權 KWON	赫 HYUCK	昌 CHANG	代表取締役 副 會 長	大象JAPAN(株) 駐日韓國企業連合會
“	朴 PARK	京 KYUNG	容 YONG	支 店 長 副 會 長	朝興銀行 東京支店 駐日韓國企業連合會
“	金 KIM	貞 JUNG	湜 SIK	社 長 副 會 長	現代JAPAN(株) 駐日韓國企業連合會
“	權 KWON	寧 YOUNG	旭 WOOK	支 部 長 副 會 長	(社)韓國貿易協會 東京支部 駐日韓國企業連合會
“	金 KIM	鎮 JIN	秀 SU	社 長	現代自動車日本(株)
“	文 MOON	幸 HAENG	奎 KYU	社 長	(株)KOREA TELECOM JAPAN
“	李 LEE	相 SANG	先 SEON	社 長	SK GROUP JAPAN
“	河 HA	英 YOUNG	鳳 BONG	社 長	LG JAPAN(株)

區 分	姓 名	團 體 會社職位	團 體 / 會 社 名
團 員	韓 洪 相 HAN HONG SANG	社 長	KEIBO JAPAN
“	金 浩 鎮 KIM HO JIN	東京支社長	(株)KOLON
“	金 南 秀 KIM NAM SOO	所 長	第一製糖 東京事務所
“	金 海 坤 KIM HAE GON	所 長	韓國機械産業振興會 東京事務所
“	辛 祥 根 SHIN SANG KEUN	所 長	東遠産業(株) 東京事務所
“	韓 永 均 HAN YOUNG KYUN	所 長	大信證券(株) 東京事務所
“	玄 雲 錫 HYUN WOON SEOK	本 部 長	韓國外換銀行
“	廉 泰 明 YUM TAE MYUNG	支 店 長	新韓銀行 東京支店
“	林 在 賢 IM JAE HYUN	支 店 長	韓國住宅銀行 東京支店
“	申 榮 敏 SHIN YOUNG MIN	企劃管理部長	(社)韓日經濟協會
“	許 南 整 HUH NAM JUNG	産業協力部長	(財)韓日産業・技術協力財團
隨 行 員	大 倉 光 OKURA MITSURU	取 締 役	大永産業開發(株)
“	有 馬 貴 司 ARIMA TAKASHI	取 締 役	大永産業開發(株)
“	申 洪 澈 SHIN HONG CHUL	所 長	(株)HOTEL新羅 東京事務所
“	權 寧 敏 KWON YOUNG MIN	研究委員	韓國經濟研究院
“	朴 鍾 甲 PARK JONG KAB	部長	大韓商工會議所

區 分	姓 名			團 體 會社職位	團 體 / 會 社 名
隨 行 員	李 YEE	王 WANG	珪 GYU	次 長	(社)韓國貿易協會
“	許 HUH	宰 JEA	豪 HO	次 長	三星電機(株)
“	朴 PARK	炳 BYUNG	振 JIN	課 長	全國經濟人聯合會
“	朴 PARK	勇 YONG	男 NAM	課 長	浦項綜合製鐵(株)
“	林 LIM	成 SUNG	憲 HUN	課 長	(株)HANWHA
“	申 SHIN	基 KI	雄 WOONG	代 理	(株)HANWHA流通
“	申 SHIN	亥 HAE	鎮 JIN	代 理	大韓商工會議所
事 務 局	柳 RYU	奉 BONG	雨 WOO	督 長	(社)韓日經濟協會
“	金 KIM	汝 YEO	種 JONG	督 長	(財)韓日產業・技術協力財團
“	宋 SONG	成 SUNG	基 GI	企 劃 役	(財)韓日產業・技術協力財團
“	趙 CHO	德 DUCK	卯 MYO	次 長	(社)韓日經濟協會
“	金 KIM	彰 CHANG	彬 BIN	次 長	(財)韓日產業・技術協力財團
“	金 KIM	正 JUNG	鎬 HO	次 長	(社)韓日經濟協會
“	朴 PARK	賢 HYUN	燦 CHAN	課 長	(社)韓日經濟協會
“	劉 YOO	崇 SOONG	勳 HUN	代 理	(財)韓日產業・技術協力財團
“	沈 SHIM	揆 KYU	榛 JIN	代 理	(社)韓日經濟協會
“	金 KIM	先 SUN	貞 JOUNG	代 理	(財)韓日產業・技術協力財團

日本側 代表團 名單

(敬稱略・順不同)

団 長	藤 村 正 哉 FUJIMURA MASAYA	(株)日韓経済協会会長 三菱マテリアル(株)相談役
副 団 長	米 倉 功 YONEKURA ISAO	(株)日韓経済協会副会長 伊藤忠商事(株)相談役
副 団 長	渡 里 杉 一 郎 WATARI SUGIICHIRO	(株)日韓経済協会副会長 (株)東芝相談役
副 団 長	岡 田 卓 也 OKADA TAKUYA	(株)日韓経済協会副会長 ジャスコ(株)名誉会長相談役
副 団 長	大 庭 浩 OHBA HIROSHI	(株)日韓経済協会副会長 川崎重工業(株)会長
名誉会長	羽 倉 信 也 HAGURA NOBUYA	(株)日韓経済協会名誉会長
顧 問	今 井 敬 IMAI TAKASHI	(株)日韓経済協会顧問 (株)経済団体連合会会長
顧 問	室 伏 稔 MUROFUSHI MINORU	(株)日韓経済協会顧問 伊藤忠商事(株)会長
参 与	梅 田 善 司 UMEDA ZENJI	(株)日韓経済協会参与 川崎重工業(株)相談役
相 談 役	三 村 庸 平 MIMURA YOHEI	(株)日韓経済協会相談役 三菱商事(株)特別顧問

団 員	秋 山	富 一	日韓産業貿易会議チェアマン 住友商事(株)相談役
	AKIYAMA	TOMIICHI	
団 員	鈴 木	政 志	野村證券(株)常任顧問
	SUZUKI	MASASHI	
団 員	山 本	正	(助)日本国際交流センター理事長
	YAMAMOTO	TADASHI	
団 員	李	熙 健	信用組合関西興銀会長
	LEE	HEUI KEON	
団 員	小 原	敏 人	日本ガイン(株)取締役会長
	KOHARA	TOSHIHITO	
団 員	坂 本	卓	日鉱金属(株)代表取締役会長
	SAKAMOTO	TAKASHI	
団 員	石 井	幸 孝	九州旅客鉄道(株)代表取締役会長
	ISHII	YOSHITAKA	
団 員	内 田	公 三	(注)経済団体連合会事務総長
	UCHIDA	KOZO	
団 員	今 田	肇	日興證券(株)取締役会長
	IMADA	HAJIME	
団 員	磯 邊	律 男	(株)博報堂取締役相談役
	ISOBE	RITSUO	
団 員	寄 木	正 敏	月島機械(株)相談役
	YORIKI	MASATOSHI	
団 員	佐 藤	晃 一	(株)ホテルオークラ相談役
	SATOW	KOICHI	
団 員	上 林	孝 典	タキロン(株)相談役
	KAMBAYASHI	TAKASUKE	

団 員	島 田	敏 生	伊藤忠倉庫(株)取締役社長
	SHIMADA	TOSHIO	
団 員	川 本	八 郎	(株)立命館理事長
	KAWAMOTO	HACHIRO	
団 員	坂 本	和 一	立命館アジア太平洋大学学長
	SAKAMOTO	KAZUICHI	
団 員	麻 生	泰	日韓中堅経済人交流促進団団長
	ASO	YUTAKA	麻生セメント(株)代表取締役社長
団 員	大 慈 彌	省 三	日韓産業貿易会議コーディネーター
	OJIMI	SHOZO	石川島播磨重工業(株)代表取締役副社長
団 員	飯 島	英 胤	東レ(株)代表取締役副社長
	IIJIMA	HIDETANE	
団 員	福 間	年 勝	三井物産(株)代表取締役副社長
	FUKUMA	TOSHIKATSU	
団 員	桜 井	健 司	三菱商事(株)取締役副社長
	SAKURAI	TAKESHI	
団 員	関	哲 夫	新日本製鐵(株)代表取締役副社長
	SEKI	TETSUO	
団 員	沼 田	平	大成建設(株)常任参与
	NUMATA	TAIRA	
団 員	佐 伯	嘉 彦	日本貿易振興会副理事長
	SAEKI	YOSHIHIKO	
団 員	高 輪	裕 通	(株)川崎重工業専務取締役
	TAKAWA	HIROMICHI	プラントエンジニアリング事業本部長
団 員	新 井	省 三	川鉄商事(株)専務取締役
	ARAI	SHOZO	

団 員	白 井 厚 三 SHIRAI ATSUMI	ニチメン(株)代表取締役専務
団 員	長 谷 川 康 司 HASEGAWA KOJI	トヨタ自動車(株)常務取締役
団 員	狩 野 英 夫 KARINO HIDEO	日興証券(株)常務執行役員海外担当
団 員	加 藤 幸 一 KATO KOICHI	三菱マテリアル(株)顧問
団 員	菅 野 利 徳 KANNO TOSHINORI	日韓中堅・中小企業委員会委員長 全国中小企業団体中央会専務理事
団 員	篠 原 徹 SHINOHARA TORU	日本商工会議所常務理事
団 員	岡 崎 誠 之 助 OKAZAKI SEINOSUKE	丸紅(株)取締役鉄鋼製品部門長
団 員	稲 垣 宏 一 INAGAKI KOICHI	(株)東芝国際関係部参与
団 員	中 村 喜 起 NAKAMURA YOSHIOKI	三菱商事(株)役員待遇業務部長
団 員	清 水 紘 一 郎 SHIMIZU KOICHIRO	(株)ホテルオークラ福岡取締役社長
団 員	丸 尾 寛 治 MARUO KANJI	(株)ホテルオークラ 取締役マーケティング本部長
団 員	小 林 秋 弘 KOBAYASHI AKIHIRO	(株)九州・山口経済連合会東京事務 所長
団 員	甲 角 健 KOSUMI TAKESHI	(株)関西経済連合会東京事務所長

団 員	鳴 沢 NARUSAWA	隆 TAKASHI	(株)野村総合研究所取締役 リサーチコンサルティング部門長
団 員	椎 野 SHIINO	謙 次 KENJI	(株)野村総合研究所主席研究員
団 員	枝 廣 EDAHIRO	泰 俊 YASUTAKA	(株)東京三菱銀行韓国総支配人 兼ソウル支店長
団 員	金 KIM	容 泰 YONG TAI	(株)東京三菱銀行ソウル支店顧問
団 員	岡 田 OKADA	治 郎 JIRO	三井物産(株)取締役 韓国三井物産社長
団 員	石 井 ISHII	勝 巳 KATSUMI	三菱電機(株)海外渉外担当部長
団 員	大 津 OHTSU	嘉 男 YOSHIO	韓国丸紅(株)代表理事社長
団 員	桑 野 KUWANO	博 信 HIROKI	韓国住友商事(株)代表理事社長
団 員	松 本 MATSUMOTO	明 久 AKIHISA	韓国伊藤忠(株)代表理事社長
団 員	石 原 ISHIHARA	忠 志 TADASHI	日産自動車(株) オセアニア・アジア一部主管
団 員	矢 野 YANO	雅 英 MASAHIDE	韓国三菱商事(株)代表理事社長
団 員	村 島 MURASHIMA	秀 次 HIDETSUGU	(株)第一勧業銀行アジア室長
団 員	高 祖 KOSO	隆 TAKASHI	(株)第一勧銀総合研究所 取締役研究開発部長

団 員	勝 田 KATSUDA	悟 SATORU	(株)第一勧銀総合研究所特別研究員
団 員	松 本 MATSUMOTO	重 敏 SHIGETOSHI	(社)日本貿易会国際・調査部長
団 員	伊 藤 ITO	保 朝 YASUTOMO	豊田通商(株)車両第一部部長
団 員	工 藤 KUDO	幸 雄 YUKIO	(株)電通 プランニング・プロデュース局部長
団 員	西 村 NISHIMURA	和 義 KAZUYOSHI	(財)日韓産業技術協力財団専務理事
団 員	成 田 NARITA	洋 助 YOSUKE	(財)日韓産業技術協力財団常務理事・ 事務局長
団 員	村 上 MURAKAMI	弘 芳 HIROYOSHI	(社)日韓経済協会専務理事
団 員	井 野 INO	正 義 MASAYOSHI	(社)日韓経済協会常務理事・事務局長
団 員	下 出 SHIMODE	道 雄 MICHIO	(社)日韓経済協会常務理事・調査部長

特別参加	梅 村 UMEMURA	正 司 SHOJI	元(株)日韓経済協会副会長
特別参加	三 好 MIYOSHI	正 也 MASAYA	前(社)経済団体連合会事務総長
特別参加	齋 藤 SAITO	成 雄 MASAO	元(株)日本貿易会専務理事
特別参加	田 中 TANAKA	宏 明 HIROAKI	元第一企画(株)会長
特別参加	守 屋 MORIYA	一 彦 KAZUHIKO	日本化学繊維協会理事長
特別参加	秋 田 AKITA	兼 三 KENZO	元(株)第一ホテル会長
特別参加	竹 内 TAKEUCHI	宏 HIROSHI	元(株)長銀総合研究所理事長
特別参加	安 達 ADACHI	哲 夫 TETSUO	富山国際大学教授
特別参加	永 野 NAGANO	芳 宣 YOSHINOBU	(財)政策科学研究所所長
特別参加	有 賀 ARIGA	敏 彦 TOSHIHIKO	(社)日韓文化協会会長
特別参加	熊 谷 KUMAGAI	直 博 NAOHIRO	(財)日韓文化交流基金理事長
特別参加	嶋 本 SHIMAMOTO	謙 郎 KENRO	日韓協力委員会専務理事
特別参加	鈴 木 SUZUKI	数 彦 KAZUHIKO	日韓協力委員会事務局長

特別参加	深川 由起子 FUKAGAWA YUKIKO	青山学院大学助教授
特別参加	石原 増男 ISHIHARA MASUO	元(株)日韓経済協会専務理事
特別参加	中嶋 慶之助 NAKAJIMA KEINOSUKE	元(株)日韓経済協会常務理事
特別参加	土岐 昭 TOKI AKIRA	元(株)日韓経済協会常務理事
特別参加	砂川 福七郎 SUNAGAWA FUKUSHICHIRO	元(株)日韓経済協会常務理事
特別参加	並木 友 NAMIKI YU	元(株)日韓経済協会常務理事
特別参加	萩原 康平 HAGIWARA KOHEI	元(株)日韓経済協会常務理事
特別参加	福田 豊 FUKUDA YUTAKA	元(株)日韓経済協会常務理事
特別参加	折田 春樹 ORITA HARUKI	元(株)日韓経済協会常務理事

(企業名五十音順)

随員	古川 和雄 FURUKAWA KAZUO	石川島播磨重工業(株)国際本部 企画渉外グループ部長
随員	後藤 次幹 GOTO TSUGIMOTO	伊藤忠マネジメントコンサルティング(株) 北東アジアチーム長
随員	寺元 孝之 TERAMOTO TAKAYUKI	川崎重工業(株)技監プラントエンジニアリング事業本部企画室長
随員	上田 功 UEDA ISAO	川崎重工業(株)秘書室部長

随 員	藤 井 FUJII	増 夫 MASUO	川崎重工業(株)国際部参与
随 員	豎 山 TATEYAMA	良 宏 YOSHIHIRO	川崎重工業(株)秘書室・主事
随 員	辻 井 TSUJII	重 信 SHIGENOBU	川鉄商事(株)ソウル支店長
随 員	山 田 YAMADA	陽 一 YOICHI	(株)九州・山口経済連合会国際部長
随 員	島 野 SHIMANO	英 明 HIDEAKI	九州旅客鉄道(株)経営企画部主査
随 員	林 HAYASHI	寛 爾 KANJI	(株)経済団体連合会北東アジア・ロシアグループ長
随 員	藤 田 FUJITA	徹 TORU	住友商事(株)市場業務部次長
随 員	藤 島 FUJISHIMA	寛 仁 KANJI	月島機械(株)海外営業第2課課長
随 員	福 田 FUKUDA	政 文 MASAFUMI	月島機械(株)海外営業第1課課長
随 員	稲 本 INAMOTO	芳 幸 YOSHIYUKI	東レ(株)経営企画第2室部長
随 員	斉 藤 SAITO	武 夫 TAKEO	トヨタ自動車(株)アジア部第2アジア室 第3営業G担当課長
随 員	三 宅 MIYAKE	通 方 MICHIMASA	ニチメン(株)調査役 元韓国日綿社長
随 員	遠 藤 ENDO	一 郎 ICHIRO	日鉱金属(株)取締役

随 員	艾 英 豪 GEORGE Y. H. AI	日興証券(株)ソウル駐在員事務所所長
随 員	徳 田 光 治 TOKUDA KOJI	日本ガイシ(株)電力事業本部海外営業部極東・中国グループ マネージャー
随 員	山 田 清 YAMADA KIYOSHI	日本商工会議所国際部副部長
随 員	小 松 靖 直 KOMATSU YASUNAO	日本商工会議所国際部課長
随 員	宇 佐 美 喜 昭 USAMI YOSHIAKI	日本貿易振興会海外調査部中国・北アジアチーム上席リーダー代理
随 員	稲 積 和 典 INAZUMI KAZUNORI	丸紅(株)業務部アジア中国大洋州市場統括課
随 員	岩 佐 洋 一 IWASA YOICHI	三井物産(株)業務部主査国際業務室
随 員	青 盛 規 AOMORI TADASU	三菱マテリアル(株)総務部秘書室長
随 員	矢 口 滋 YAGUCHI SHIGERU	三菱マテリアル(株)総務部秘書室・秘書
随 員	早 乙 女 雅 子 SAOTOME MASAKO	三菱マテリアル(株)総務部秘書室・秘書
随 員	森 川 彰 MORIKAWA AKIRA	立命館大学東京オフィス所長
随 員	橋 本 一 美 HASHIMOTO KAZUMI	全国中小企業団体中央会国際部長
随 員	及 川 勝 OIKAWA MASARU	全国中小企業団体中央会国際部副参事

随 員	須々木 SUSUKI	智 行 TOMOYUKI	(財)日韓産業技術協力財団事業管理部長
事 務 局	向 井 MUKAI	林 太 郎 RINTARO	(社)日韓経済協会業務部部长
事 務 局	色 摩 SHIKAMA	隆 一 RYUICHI	(社)日韓経済協会業務部部长
事 務 局	保 坂 HOSAKA	昭 寿 AKITOSHI	(社)日韓経済協会調査部主任調査役
事 務 局	浅 見 ASAMI	俊 之 TOSHIYUKI	(社)日韓経済協会調査部主任調査役
事 務 局	桂 KATSURA	真 治 SHINJI	(社)日韓経済協会調査部調査役
事 務 局	吉 野 YOSHINO	建 夫 TATEO	(社)日韓経済協会総務部長
事 務 局	伊 藤 ITO	美 千 代 MICHIO	(社)日韓経済協会総務部員

開 會 式

〈開會式〉

團 長 人 事



日 本 側 代 表 團
團 長 藤村 正哉

방금 소개받은 日韓經濟協會 會長을 맡고 있는 藤村 正哉(후지무라 마사야)입니다. 2000년이라고 하는 새 천년이 시작하는 해 이 東京에서 第32回 日韓・韓日經濟人會議가 개최되게 되었습니다. 회의 개최에 즈음하여 일본측을 대표하여 인사말씀 올리겠습니다.

존경하는 金相廈 단장님을 비롯한 한국측 대표단 여러분께서 150명 가까운 사상 최대의 代表團을 구성하시어 멀리 이렇게 일본을 찾아 주신데 대해서 심심한 환영의 인사, 그리고 감사의 인사를 드리고자 합니다. 또 今井 敬(이마이 다카시) 經濟團體連合會 會長님을 비롯한 일본측 대표단 여러분께도 다망하신 가운데 이렇게 다수 참석해 주신 점에 대하여 심심한 감사를 드리고자 합니다.

그리고 내빈으로 참석해 주신 崔相龍 駐日本國大韓民國 特命全權大使님 각하, 그리고 일본측에서 내빈으로 참석해 주신 中曾根 康弘(나카소네 야스히로) 前 內閣總理大臣이고 現 日韓協力委員會 會長님께서도 다망하신 가운데 임석해 주셔서 영광으로 생각하는 바입니다. 진심으로 감사를 드리고자 합니다. 이번 經濟人會議는 예년보다 두 달 늦게 개최되었습니다. 그러니까 약 1년 2개월만에 이렇게 여러분들의 건강한 모습을 뵈 수 있게 되었음을 기쁘게 생각합니다.

1990년대는 日本經濟라는 면에서 볼 때 버블 붕괴 후에 경제 재건에 동분서주했던 그야말로 바쁜 10년이었습니다. 심각한 不況에도 불구하고 각종 정책 효과라든가 아시아경제의 회복 등에 힘입어 최근 들어 간신히 경제 회복을 위한 조짐이 나타난 상태입니다.

반면에 韓國은 작년에 外換 金融危機를 극복하시고 새로운 성장을 향한 커다란 걸음을 내딛었던 해였습니다. 즉 일련의 經濟 構造調整이 결실을 맺고 그 결과 10.7%라고 하는 높은 경제성장을 이룩하셨습니다. 최악일 때는 8.6%에 다다랐던 失業率도 지금은 4%대로 개선이 되었으며, 각종 경제지표는 꾸준한 상승세로 호전을 보이고 있습니다. 대단히 기쁘게 생각합니다.

그리고 양국을 에워싸고 있는 동아시아로 눈을 돌리게 되면 일본과 북한간의 국교정상화 협상이 재개되었으며, 6월 12일부터는 남북 분단 이후 최초의 남북 頂上會談이 개최될 예정인 등 한반도의 안정과 긴장완화를 위한 기운이 높아지고 있습니다. 또 대만에서는 5월 20일에 신 총통이 탄생한 바 있으며, 중국과 대만 관계의 향후 동향으로부터 눈을 뗄 수 없는 그런 상황입니다.

이와 같은 동아시아 정세가 변화의 조짐이 나타나고 있는 작금에 일본과 한국, 그리고 중국이라고 하는 세 나라가 대화와 협력을 심화시키면서 상호 연대 하에 아시아의 안정적인 발전을 도모하는 것이 기대되고 있습니다. 그런 가운데 다음 달에 개최될 쿼슈 오키나와 서미트는 21세기를 전망하며 아시아 여러 나라의 의견을 반영할 수 있는 절호의 기회라고 생각하며, 실로 뜻 깊은 회의가 될 것으로 기대되고 있습니다.

이처럼 日本과 동아시아간의 지역 연대, 혹은 지역 통합의 필요성이 고조되고 있는 가운데 99년도판의 通商白書를 보면 앞으로의 일본 통상정책에 있어서 중요한 방향전환이 이루어진 바 있습니다. 다자간, 그리고 역내, 쌍무간에 각종 협의가 적절히 결합된 中層的인 通商政策으로 전환한다고 하는 것이 나와 있습니다. 즉 일본은 과거에 WTO를 중심으로 한 다면적인 자유무역체제를 최우선시하는 기본정책을 취해 왔습니다만, 앞으로는 이웃 동아시아, 그리고 지역연합체와의 연대 강화도 병행하면서 추진한다고 하는 중층적인 정책으로 바꾼다고 하는 것입니다. 이와 같은 방향 전환이라고 하는 것에 대해서는 올해 通商白書에도 명백히 나와 있습니다.

이와 관련하여 한일 관계를 보면 연내의 체결을 목표로 투자협정 체결협상이 현재 추진되고 있습니다. 또 自由貿易協定에 관해서는 일본의 아시아경제연구소

와 한국의 對外經濟政策研究院(KIEP)이 공동 연구를 수행한 바 있으며, 그 결과가 최근에 발표된 바 있습니다. 양국 경제의 경쟁력 강화로 이어질 것으로 생각이 되며 전향적인 검토가 요망되고 있습니다.

이와 같은 관점에서 최근의 한일 관계에 대해서 돌아켜 보면, 재작년 10월에 金大中 大統領 각하의 일본 방문을 계기로 시작되었던 21세기를 향한 새로운 日韓・韓日 파트너쉽 구축을 위한 흐름은 지금 계속 면면히 이어져 내려오고 있으며, 양국의 교류는 政治・文化 등 다방면에 걸쳐서 꾸준히 증진되고 있습니다. 또 2002년의 월드컵 축구 공동개최를 목전에 둔 지금 올해부터 3년 동안에 걸쳐서 韓日・日韓 페스티벌이 일본과 한국에서 각기 개최되는 등 한일 양국간의 교류는 다방면에 걸쳐서 활발해지고 있습니다.

이와 같은 人的 交流, 文化的 交流가 활발해짐에 따라서 양국민의 흥미를 터놓은 자유로운 논의가 진척되고 있음에 대해서 이를 환영해야 할 흐름이라고 생각하고 있습니다. 저희들이 주최하고 있는 會議, 交流事業도 예외는 아닙니다. 작년 4월에 日韓・韓日經濟人會議를 비롯하여 10월에 개최된 産業貿易會議, 11월에 열렸던 中堅經濟人交流會 등에서는 과거에 유래가 없었을 정도로 기탄 없는 솔직한 의견교환이 이루어졌습니다. 이 역시 일본과 한국의 우호관계의 확고하고도 커다란 전진이라고 볼 수 있을 것입니다.

兩國 代表團 여러분. 이상 말씀드린 바와 같이 다양한 분야에서 다양한 채널을 통하여 꾸준히 진전되고 있는 새로운 日韓・韓日 파트너쉽 구축이 양국뿐 아니라 아시아 전체의 발전에도 공헌하는 것임을 다시 한번 이해하시고 인식하시기를 부탁드립니다. 그리고 20世紀 마지막 해에 열리는 본 회의가 솔직하고 많은 결실을 거두는 의견교환의 장이 되어서 많은 성과를 거둘 수 있기를 진심으로 기원 드리면서 개최 인사로 대신하겠습니다. 傾聽해 주셔서 대단히 感謝합니다.

〈開會式〉

團 長 人 事



韓 國 側 代 表 團
團 長 金 相 廈

오늘 第32回 韓日・日韓經濟人會議에 大學 參席하여 주신 藤村 正哉(후지무라 마사야) 團長님을 비롯한 日本側 代表團 여러분과 韓國側 代表團 여러분.

그리고 公私多忙하신 가운데에도 이 자리를 빛내 주시기 위해 枉臨하신 前總理大臣이시며 지금은 日韓協力委員會 會長이신 中曾根 康弘(나카소네 야스히로) 閣下와 駐日大韓民國特命全權大使이신 崔相龍 閣下를 비롯한 來賓 여러분께, 韓國側 團長으로서 甚深한 感謝의 뜻을 表하는 바입니다.

우리들의 이 韓日・日韓經濟人會議가 韓日・日韓民間合同經濟委員會라는 名稱으로 첫 會議을 開催했던 것이 1969年の 일이었습니다. 그로부터 어언 32年の 긴 歲月이 흐르는 동안 會議의 名稱이 지금의 韓日・日韓經濟人會議로 改稱된 것으로도 나타나듯이, 兩國間 經濟協力の 質과 內容 面에서 많은 變化와 더불어 큰 發展이 이룩된 것은 익히 周知의 事實입니다.

그런데 여기서 特別히 強調하고 싶은 것은, 길다면 길고 짧다면 짧은 32年 동안 兩國 關係에는 여러 가지 우여곡절과 變化가 있었음에도 不拘하고, 우리의 이 會議만은 단 한번도 거르지 않고 이어져 왔다는 事實입니다. 이는 兩國 經濟人들이 이 會議에 쏟는 熱과 誠, 그리고 강한 意慾을 雄辯하고 있는 證左라고 아니 할 수 없습니다.

親愛하는 兩國 代表團 여러분.

우리 두 나라의 關係는 特히 金大中 大統領이 就任 後 小渕 惠三(오부치 게이조) 當時 總理와의 交換訪問을 통해 相互信賴를 바탕으로 하는 굳건한 紐帶關係가 確立되어 協力關係가 堅固한 土臺위에 構築되었으며, 또 지난 29日에는 森 喜朗(모리 요시로) 總理의 訪韓으로 相互信賴와 協力關係의 基盤이 더욱 鞏固하게 굳혀졌습니다.

이러한 相互協力關係가 陰으로 陽으로 作用하여 한때 停滯되었던 兩國 經濟에 活力을 불어넣어, 韓國은 소위 IMF 管理體制에서 벗어나 모든 經濟指標가 보여주고 있듯이 새로운 跳躍을 指向하고 있습니다. 日本도 역시 長期不況의 늪에서 脫出하여 새로운 好況이 시작되고 있는 것으로 알고 있습니다.

그리고 兩國 協力이 가져온 成果는 비단 經濟에만 局限되는 것이 아니라 各分野에서도 相互協力の 實效가 나타나고 있는 것입니다. 두 차례에 걸친 韓國의 日本文化開放, 人的交流의 飛躍적인 増大를 통한 相互理解의 深化, 그리고 2002年의 월드컵 共同開催는 韓日 兩國의 紐帶와 結束을 가져와 共同繁榮의 기틀을 더욱 促進 強化시킬 것으로 期待되고 있습니다.

친애하는 兩國 代表團 여러분.

2000年들어 처음 개최되는 뜻깊은 이번 會議에서, 兩國 經濟人들이 서로 胸襟을 털어놓고 앞으로의 1000年 동안 이룩해 나아갈 協力方向을 정립하겠다는 마음으로 活潑한 討議와 새로운 提言을 展開하여 주시기를 간곡히 當付드리는 바입니다.

마지막으로 兩國間 友好協力 基盤의 強化를 위해 盡力해 주신 故 小渕 惠三(오부치 게이조) 前總理大臣閣下の 功績을 기리는 마음에서 깊은 哀悼와 冥福을 祈願하면서 저의 인사말씀을 마치겠습니다.

傾聽하여 주셔서 대단히 感謝합니다.

〈開會式〉

來賓祝辭



日韓協力委員會
會長 中曾根 康弘

먼저 일한·한일경제인회회가 이렇게 성대하게 개최됨을 진심으로 경의를 표하면서 이 자리를 빌어 축하를 드리고자 합니다. 최근 들어 특히 金大中 대통령 각하의 일본 방문에 의해서 양국 관계는 크게 전진되었다고 볼 수 있습니다. 21세기를 향한 커다란 기대감과 희망을 저희들에게 안겨 주었습니다. 그리고 지금 우리들은 20세기와 21세기의 분수령에 서있다고 볼 수 있겠습니다. 21세기를 전망하면서 양국 국민이 진심으로 손에 손을 맞잡고 새로운 시대를 향해 전진해 나가야 할 나집을 새롭게 해야만 하는 그런 시기에 직면해 있는 것이 아닌가 싶습니다.

우리 주변을 둘러보더라도 지금 세계적인 그리고 세기적인 행동의 변화가 일어나고 있습니다. 구조 변화가 이루어지고 있습니다. 러시아에서도 새로운 대통령이 취임하셨고 또 북한에서는 김정일 국방위원장이 29일부터 어제까지 북경을 방문했다고 합니다. 그리고 장쩌민 수상과 접견했으며, 또 한국의 金大中 대통령과의 정상회담에 대비한 중국과 북한간의 협의를 했다고 들었습니다. 그야말로 격변하고 있는 시대에 직면하고 있는 것입니다.

그리고 대만에서는 신총통이 탄생한 바 있습니다. 우리 주변을 둘러볼 때 이렇게 커다란 정치적인 구조전환이 이루어지고 있다고 볼 수가 있겠습니다. 이런

인물들이 어떠한 시대를 구축할 것인가, 일본은 내일 중의원이 해산합니다. 어떠한 정치 결과가 나올지 우리 정치인들도 지금부터 그야말로 심혈을 기울인 노력을 경주해야 하는 시기인 것입니다.

그러나 어떤 커다란 관점에서 볼 때 세계는 평화를 향한 방향으로 그리고 서로 손을 잡고 협력하는 방향으로 굳센 걸음을 힘찬 걸음을 내딛고 있는 것이 아닌가 싶습니다. 동아시아에서는 한국과 일본이 진심으로 손을 맞잡는 것이 평화와 번영의 기초가 된다고 저는 확신하고 있습니다.

저는 총리대신으로 취임했을 때 일본의 외교정책의 순서라는 것을 제시한 바가 있습니다. 이것을 행동으로 저는 보였습니다. 제 첫 방문지가 한국이었습니다. 그전에 다른 총리들은 미국에 먼저 갔습니다. 저는 두 번째 방문지로 미국에 갔고 그 다음에 아세안, 중국, 그 다음에 유럽을 예방했습니다. 최근 들어 한국과 일본의 관계는 이와 같이 굳진한 관계가 되고 있으며, 월드컵 축구대회를 향해 국민 차원에서의 연대감이 강화되고 있음을 진심으로 기쁘게 생각합니다. 새로운 문명, 새로운 성과를 낳는 하나의 원동력으로 삼아야 할 것이라고 생각하고 있습니다.

경제분야에서도 커다란 구조 전환이 이루어지고 있습니다. 세계적인 금융기관의 대규모 합병이 이루어졌으며, 또 기타 산업의 개편, 합병이 이루어지고 있습니다. 뜻밖의 사건들이 보도되고 있습니다. 일본 국내에서나 한국에서도 마찬가지겠습디만, 금융기관의 대형 합병이 이루어진 바 있습니다. 이는 과거의 금융버블, 거품경제의 수습이라는 의미도 있습니다만, 대형 합병이라고 하는 것이 힘차게 진전되고 있습니다. 그리고 지방의 중소기업의 합병으로까지 진전될 하나의 조짐이 아닌가 하는 분석도 있습니다.

그 밖의 철강 분야, 중화학공업 분야에 있어서도 합병과 제휴가 정말 팔목할 정도로 진척되고 있습니다. 이와 같은 움직임은 새로운 시대에 대비한 움직임이라고 볼 수 있겠습니다. 여기서 우리가 주목하고자 하는 것은 IT 혁명입니다. 인포메이션 테크놀로지 레블루션이라고도 부를 수 있는 IT 혁명에 대비하여 방금 말씀드렸던 이와 같은 움직임이 대두되고 있는 것이 아닌가 싶습니다.

이러한 움직임이 앞으로 어떠한 방향으로 나아갈 것인지 우리 정치인들로서도 주목하고 있으며, 그 공정관리표를 신속히 인수하여 정치인으로서의 어떤 대응을 강구해야 할 시기라고 생각하고 있습니다만, 현실은 우리 정치인들이 생각하는 그런 정도까지는 진전이 안되고 있는 것 같습니다. 그렇지만 우리는 우리가 해

야 할 많은 일거리들이 남아 있다고 생각합니다.

그런 과정에서 일본과 한국의 경제인들이 그 구체적인 실천을 위해서 전진하고 있는 것이 아닌가 싶습니다. 저는 아까도 말씀드렸듯이 동아시아의 평화와 번영의 기초는 한국과 일본이 진심으로 연대를 함으로써 가능하다고 확신하고 있습니다. 여러분들 경제인들의 상호 연대감이라는 것이 그 공간을 이루는 것 중에 하나라고 생각하고 있습니다.

또한 구체적으로는 지금 한일 양국에서는 자유무역협정을 위한 연구가 추진되고 있다고 들었습니다. 자유무역협정의 실현을 위해서 서로 노력하여 이 분야에서도 전진이 있기를 바랍니다. 협정 체결까지 안가더라도 사실상의 합의를 구축하여 실천으로 이어지게 하는 것이죠. 일본은 싱가포르도 협정을 체결하려고 하고 또 태국과도 하려는 움직임이 있습니다. 또 한국도 각각의 나라들과 이런 협정을 체결하려고 하고 있습니다. 이와 같은 네트워크를 구축함으로써 이런 것들이 다시 통합이 되는 것이 21세기 초반 10년 정도에 실현되는 것이 아닌가 생각합니다.

또 이와 동시에 금융분야에 대해서 말씀을 드리면, 동아시아 각국, 그리고 아세안의 국가들, 이런 국가들의 금융협의회를 정식으로 발족시켜서 일본의 대장성 장관, 혹은 총리대신 차원의 어떤 정기적인 합의를 한다는 것도 앞으로의 미래를 대비한 움직임이 아닌가 싶습니다. 우리의 어떤 제휴의 성과를 가시화시킨다는 측면에서 중요할 것입니다. 금융 면에서 상호 연대와 협력을 한다는 것을 의미하는 것이며, 그리고 각각의 개혁에 대해서 서로 배우고 자국의 개혁에 공헌하게끔 하는 그런 길이 될 수도 있을 것입니다. 또 헛지펀드에 대응하는 공동 방어책이 여기서 탄생될 수도 있을 것입니다.

그리고 그 앞날에는 동아시아 경제권이라고 하는 것이 21세기 초반에는 서서히 대두되고 탄생할 것입니다. 미국과 유럽은 이를 탐탁지 않게 생각할지 모르겠습니다만, 그들 자신은 이미 그런 움직임을 보이고 있습니다. 우리가 오히려 뒤쳐진 셈입니다. 그러한 가운데 투명성이 갖는 동아시아의 결속이라고 하는 것이 필요하다고 봅니다. 이와 같은 방향을 향해서 저는 정치인으로써 프로모터를 위해 공헌하고자 합니다.

IT 혁명에 대해서는 지금 구체적으로 어떤 현상이 나타날 것인지, 어떤 결합체가 형성될 것인지, 그리고 어떤 새로운 기술이 탄생할지 세계적으로 국내적으로 지금 크게 주목되고 있는 바입니다만, 아직 불투명한 부분이 있습니다. 여러분들

의 연구에 의해서 우리 정치인들과 우리 국민들에게 어떤 예감과 같은 것이라도 제시해 주신다면 대단히 감사하겠습니다.

양국의 실력 있는 경제인들께서 이렇게 한 자리에 모여서서 양국 관계와 동아시아 관계 전반에 걸친 경제문제에 대해서 토의를 하신다는 것, 이것은 이 시대에 정말 걸맞는 시의적절한 일이며 많은 성과를 기대하는 바입니다. 이상 축사로 대신하겠습니다. 감사합니다.

〈開會式〉

來賓祝辭



駐日大韓民國特命全權大使

崔 相 龍

친애하는 藤村 正哉(후지무라 마사야) 일한경제협회 회장님, 金相廈 한일경제협회 회장님, 中曾根 康弘(나카소네 야스히로) 일한협력위원회 회장님, 그리고 양국 대표단 및 내빈 여러분. 이렇게 대단한 자리에 저를 초청해 주셔서 대단히 감사합니다.

지금 이 자리에 戰後 패전 일본을 전세계 두 번째 가는 경제대국으로 만들어놓은 일본의 기업과 그 후계 대표 리더들이 와 계십니다. 또 지금 이 자리에는 전쟁과 가난을 물리치고 한강의 기적을 걸쳐서 대한민국을 세계 중견 무역국가로 만들어놓은 대한민국의 기업가 지도자 분들이 나와 계십니다. 제가 보기에 여러분들은 각기 자기 나라의 훌륭한 애국자들이고 동시에 한일 관계 유대를 견고히 하는 가교의 역할을 하는 대단히 중요한 분들입니다.

여러분 아시다시피 지금 한일 관계는 1965년 국교정상화 이래 가장 좋은 관계에 있습니다. 절정이라고 해도 과언이 아닙니다. 특히 정부 레벨에는 극복하지 못할 문제가 거의 없습니다. 비교적 이런 순탄한 시기에 제가 일본 대사로 온 것을 무척 다행스럽게 생각합니다. 이미 앞에 몇 분이 중요한 말씀을 하셨기 때문에 한두 가지만 말씀드리겠습니다.

지금 일본과 한국은 민주주의와 시장경제라고 하는 공동의 목표를 가지고 있습니다. 이것은 대단히 중요한 것입니다. 지금 전세계에서 비서양 나라로서 시장경제와 민주주의를 실천하고 있는 두 나라가 바로 일본과 한국입니다. 동아시아의 다른 나라에 비해서 일본과 한국은 그 시장경제와 민주주의에 대한 확신이 가장 강한 나라들입니다. 어느 학자가 민주주의 없는 시장경제는 병어리고 시장경제 없는 민주주의는 절름발이라고 했습니다. 민주주의와 시장경제는 일심동체입니다.

여러분 아시다시피 한국과 일본은 문맹률이 거의 제로입니다. 도대체 이 두 나라만큼 교육열이 높은 나라가 세계 어디에 있습니까. 따라서 일본과 한국이 민주주의와 시장경제를 갖고 있는 것은 단순히 두 나라 관계만이 아닙니다. 동아시아에 높은 수준의 국민을 가진 두 나라가 민주주의와 시장경제를 함으로써 이 결과가 세계에 보내는 메시지는 대단히 크다고 저는 확신하고 있습니다.

최근의 연구에 의하면 시장경제를 하는 두 나라가 경제교류가 심해지고 경제적 상호의존도가 높아지면 높아질수록 평화로 이어진다고 하는 연구결과가 나와 있습니다. 예컨대 이코노믹 인터디펜던스 리즈 피이스라고 하는 중요한 이론이 나오고 있습니다. 경제적으로 주고받는 깊은 관계에 있는 두 나라 사이에는 대체로 평화가 유지된다고 하는 것입니다. 이런 연구자들의 연구에 의해서도 한일 관계의 전망은 대단히 밝습니다.

내일 일정을 보니까 무역불균형의 근본 원인과 대책 등등 대단히 중요한 현안 문제가 있는 것으로 알고 있습니다. 또 나카소네 선생님께서 말씀하신 FTA도 있습니다. 저는 경제 전문가가 아니기 때문에 깊이 들어가지는 않겠습니다만, 한일 두 나라 사이에 존재하고 있는 경제적인 문제는 결코 극복하지 못할 문제는 아니라고 하는 사실입니다. 제가 지난 2개월 동안 경제문제에 관한 많은 브리핑을 받아 보았습시다만, 무역불균형 문제는 근본적으로 구조적인 문제로 이러한 구조적인 문제는 일조일석에 해결되지 않는다는 것을 알게 되었습니다.

따라서 구조적으로 문제가 있는 것은 기능적으로 해결할 수밖에 없는 것이 현실입니다. 그래서 그 기능적인 해결에는 들어보니까 전략적 제휴라는 이름으로 산업간·지역간·기업간에 여러 가지 제휴의 움직임이 있습니다. 이 또한 여러분들의 오랜 경험과 식견, 용기로서 풀어나가리라고 생각합니다.

사무엘슨이 경제는 아주 연약한 꽃이라고 했습니다. 토양만 좋으면 얼마든지 피어날 수 있는 것이 경제라고 했습니다. 어쩌면 경제는 기업을 중심으로 한 경

제주체가 합리적으로 개선해 나가서 주거나 받거나 하는 과정입니다. 그냥 버려두면 되는 것이라고 봅니다. 문제는 오히려 정치적 불안정, 경제 외적인 문제 때문에 경제를 발목 잡는 일이 참으로 많다고 생각합니다.

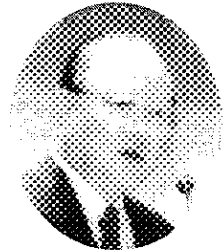
그래서 저는 가능하면 경제는 경제인들의 합리적인 판단에 맡기고 그 경제를 도와 줄 수 있는 정치적인 여건을 만드는 것이 오늘날 가장 중요한 일이 아닌가 생각하고 있습니다. 다행히 현재 한일간에는 그렇게 나쁜 정치적인 난제들이 없습니다. 그래서 앞으로는 여러분들이 마음놓고 합리적인 판단에 의해서 경제활동을 할 수 있게끔 정치·외교 면에서 전면적으로 도와 주는 일에 저도 주일대사로서 진력하고자 합니다.

월드컵 얘기는 하도 많이 나와서 귀가 아플 지경입니다만, 월드컵은 아무리 강조해도 그 중요성이 모자라지 않습니다. 한국과 일본은 길게는 1300년의 역사가 있습니다만, 두 나라가 같이 공동작업을 한 경우가 그다지 없습니다. 이 월드컵은 오랜 전통을 가진 두 나라가 공동으로 하는 일입니다. 아마 이것은 한국과 일본 두 나라만의 일이 아닙니다. 전세계가 동아시아의 민주주의와 시장경제를 하고 있는 두 나라가 어떻게 일을 잘 하느냐 하는 것을 주목할 것입니다. 이 자리에 있는 지도자 분들이 서로가 협력을 해서 월드컵이 성공적으로 개최될 수 있도록 많은 협력을 해 주시면 고맙겠습니다.

저는 앞으로 얼마나 있을지 모르겠습니다만, 여러분들이 하는 일에 조금이나마 도움이 된다면 발로 뛰고 온몸을 다해서 노력하리라고 이 자리에서 감히 말씀드립니다. 여러분 건강하십시오. 감사합니다.

〈開會式〉

顯 問 人 事



前 (社)日本貿易會
會長 室 伏 稔

한국측의 金相廈 단장님, 일본측의 藤村 正哉(후지무라 마사야) 단장님, 그리고 내빈 여러분, 그리고 양국의 대표단 여러분. 저는 방금 소개받은 무로후시 미노루라고 합니다. 인사말씀을 올리기 전에 제32회 일한·한일경제인회의가 양국의 경제계를 대표하시는 여러분들과 그리고 다수의 내빈 여러분들께서 참석하신 가운데 성대하게 개최됨을 진심으로 기쁘게 생각합니다. 또 이와 같은 기회에 일한경제협회의 고문으로써 인사드릴 수 있음을 커다란 영광으로 생각합니다.

제가 회장을 역임했었던 일본무역회는 제작년까지 무역투자위원회의 일본측 위원장 조직으로서 한국측의 위원장 조직인 한국무역협회와 긴밀한 연계 관계를 맺어왔습니다. 양측의 연계 하에 합동위원회를 개최해 왔으며, 무역·투자상의 각종 문제를 논의하는 등 큰 성과를 거두었습니다.

제작년의 무역투자위원회는 각종 위원회 조직의 개편, 재검토 등등에 따라서 산업무역회의로 발전적으로 통합된 바 있습니다. 이 산업무역회의에서도 무역과 투자 문제가 논의의 중심이 된다는 것은 분명한 사실일 것이라고 생각합니다.

산업무역회의는 또한 경제인회의에서 제기된 주요과제에 대해서 양국 위원들이 검토하고 그 결과를 다음해에 개최되는 경제인회의 식사에서 보고한다는 역할도

수행하고 있습니다. 따라서 이번 회의에서도 그 어떤 중요한 과제가 제기되는지 여부에 대해서 저는 크게 주목하고 있습니다.

일본의 정치·경제의 현황 및 그 전망에 관해서는 바로 이어서 기초연설을 해주실 정단련의 스井(이마이) 회장님께서 말씀해 주실 것입니다. 따라서 저는 다음 두 가지 사항에 대해서 간단하게 말씀드리겠습니다.

첫 번째는 한국경제에 대한 저의 인상입니다. 일본무역회는 아시아 여러 나라들과 商社하고의 관계를 주제로 한 특별연구를 수행하고 있습니다. 아마 머지않아 그 보고서가 완성될 것으로 압니다만, 보고서의 초안을 제가 봤더니 한국은 1998년 초에 IMF가 긴급지원을 시작한 이후 경이로운 속도로 경제 구조개혁, 기업경영 개혁을 추진하시어 단시간 내에 태반의 위기는 극복하셨다고 보고서에 나와 있었습니다.

민간부문이 철저하게 사업의 선택과 집중을 하였고, 정부 차원에서는 경제의 대외개방이라든가 첨단산업이나 벤처기업 육성, 창업을 도모하셨던 결과가 아닌가 싶습니다. 또한 재계와 소비자들과 정부가 하나가 되어서 경제의 투명성 증진을 위해 노력하셨다는 것도 해외의 신뢰감 획득으로 이어졌던 것이 아닌가 싶습니다.

물론 해결에 많은 시일을 요하는 그런 어려운 문제점들도 있을 것입니다. 그러나 이번 경제회복 과정에서 한국경제는 이른바 변화에 대응하는 유연성이 있구나, 혹은 적응력이 있구나 하는 점이 그야말로 명실공히 실증되었다고 생각이 됩니다. 저는 한국경제의 앞날은 대단히 밝다고 생각하고 있습니다.

두 번째 말씀드릴 사항은 한일관계에 관한 것입니다. 정보통신기술의 발달은 비즈니스의 세계화, 글로벌화를 가속화시키고 있습니다. 이와 같은 환경에 대응하기 위하여 양국 경제관계는 더욱 더 긴밀도를 더해가야 한다고 생각하며, 이것은 일본의 경제계로서도 크게 환영할 일이라고 생각하고 있습니다.

현재 정부 차원에서는 일한자유무역협정에 관련된 사항이 검토되고 있습니다. 그런데 WTO와 같은 다자간협정이 많은 문제점을 안은 가운데 좀처럼 진척을 보이지 못하고 있는 상황을 보건대 이와 같은 쌍무적인 관계, 혹은 지역협정 확충이라고 하는 것에 역점을 두게되는 기운이 드높아지고 있다 라고 하는 것은 당연한 결과가 아닌가 하는 생각도 듭니다.

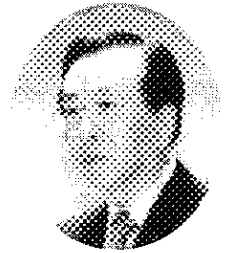
현재 일본은 한국 외에도 멕시코라든가 싱가포르와 자유무역협정 체결의 가능성을 검토하고 있습니다. 이처럼 쌍무간의 협정의 대상국을 확대해 가는 것은 WTO의 논의를 촉진하고 보완하기 위한 하나의 접근 방식으로서 보다 적극적인 의의를 부여해야 마땅하다고 생각하고 있습니다.

마지막으로 이번 경제인회의를 통하여 양국의 이해와 협력관계가 가일층 심화될 것으로 확신하면서, 가까운 장래에 가서는 이것이 한걸음 더 나아가서 우리 일본과 한국의 공동의 이웃나라이기도 한 조선민주주의 인민공화국에 대한 경제분야 협력 같은 것도 의제의 하나로 다루어지는 것은 아닌가 하는 생각도 듭니다.

이상 간단하나마 저의 인사로 가름하겠습니다. 본 회의의 성공을 기원하겠습니다. 감사합니다.

〈開會式〉

顧問人事



(社)韓國貿易協會
會長 金 在 哲

존경하는 후지무라 마사야(藤村 正哉) 회장님, 金相廈 회장님, 崔相龍 駐日대한민국특명전권대사님, 그리고 양국 경제계 인사 여러분.

오늘 본인이 한일경제협회의 고문으로 한일 경제인 여러분께 인사말씀을 드리게 된 것을 매우 기쁘게 생각합니다.

올해로 32번째를 맞는 본 회의는 그 동안 한일 양국간 민간경제교류 확대에 큰 역할을 하여왔다고 믿고 있으며, 앞으로 더욱 많은 성과를 거둘 수 있기를 기대하고 있습니다.

한국경제는 97년 외환위기로 IMF의 관리를 받는 등 어려운 과정을 겪어 왔습니다만, 우리 국민의 노력과 일본 등 우방 여러나라의 도움으로 이를 슬기롭게 극복하였습니다. 이 자리를 빌어 일본정부와 경제계의 지원과 격려에 대해 감사드립니다.

양국 관계는 지난 2~3년간 양국 정상회담과 경제각료회의, 그리고 경제계의 다각적인 교류협력의 결과 더욱 우호적이고 미래지향적으로 발전되어 왔다고 생각합니다.

특히 지난 5월 29일 모리 총리의 방한은 이런 관계를 더욱 발전시키는 기회가 되었으며, 2002년 월드컵 공동개최는 한일 양국간 협력체제를 더욱 공고히 하는 계기가 될 것으로 확신합니다.

한일 경제인 여러분 !

많은 Economist들은 20세기가 대서양의 시대였다면 21세기는 태평양의 시대가 될 것으로 예상하고 있습니다. 특히 한국, 일본 및 중국을 중심으로 한 동북아경제가 세계경제를 리드할 것이며, 그 과정에서 우리 한일 경제인들의 협력이 무엇보다도 중요하다고 지적하고 있습니다.

한일 양국경제인들은 최근의 양국간 우호적인 분위기를 바탕으로 협력의 분야를 보다 넓혀야 하겠습니까. 무역뿐만 아니라 21세기 들어 새롭게 부상하고 있는 정보통신, 환경 및 물류 부문 등에서 서로 협력해 나간다면 양국 경제발전은 물론, 아시아경제를 이끌어 가는 강력한 추진력이 될 수 있을 것으로 생각합니다.

이와 같은 의미에서 이번 회의 의제인 ‘한일 양국간의 정보통신 및 환경산업 분야에서의 협력방안’은 매우 시의적절하다고 생각합니다.

본인은 양국간 물류분야에서의 협력이 매우 중요하다고 생각하여, 다음 번 회의에서 ‘동북아 물류협력체제 구축’이나 ‘양국간 해상수송체제 확립’ 등과 같은 분야에서의 협력방안에 관한 논의가 이루어 질 수 있기를 기대하고 있습니다.

한일 양국 모두 물류비가 지나치게 높은 점을 감안할 때, 한일간 상호 연안해운시장개방이 이루어진다면, 내륙운송의 상당부분이 연안수송으로 대체될 수 있어 상당한 물류비용 절감이 가능할 것입니다.

존경하는 한일 경제인 여러분 !

21세기는 실질적인 성과가 평가받는 시대입니다. 이번 회의가 아무쪼록 보다 실질적이고 구체적인 협력방안을 모색하고, 이를 실천에 옮겨 나가는 계기를 마련할 수 있게 되기를 기대하면서, 한일·일한경제인회의의 무궁한 발전과 양측 대표 여러분의 건승을 기원합니다. 감사합니다.

基 調 演 說

〈日本側 基調演說〉

日韓 兩國을 둘러싼 環境變化와 새로운 協力關係의 摸索을 위하여



(社)經濟團體連合會
會長 今井 敬

【머리말】

지금 소개받은 경단련의 이마이(今井)입니다. 후지무라(藤村) 회장님과 金相廈 회장님을 비롯한 내빈 여러분. 전통을 자랑하는 한일·일한경제인회의 석상에서 기조연설을 할 수 있는 기회를 주셔서 대단히 영광스럽게 생각합니다.

오늘 저는 여러분들께 일본경제의 현황 및 과제, 나아가 한일 양국의 경제관계에 대해 말씀드리도록 하겠습니다.

【일본경제의 현황 및 과제】

1. 일본은 97년 발생한 대형 금융기관의 파탄을 계기로 시작된 경제의 장기불황을 극복하기 위해 최근 몇 년간 세제와 법제, 경제운영 및 기업경영 등 각종 분야에서 구조개혁을 추진해 왔습니다. 이 구조개혁은 아직 완전히 끝나지 않았으나 몇 년간 관민 합동으로 구조개혁을 위해 노력한 결과 경기회복의 움직임이 선명하게 나타나고 있습니다.

특히 생산 및 수출 등의 지표가 매우 순조로운 모습을 보이고 있고 기업수익 역시 급속도로 회복되고 있으며, 경기의 자율적 회복에 필요한 설비투자도 침체 국면에서 증가국면으로 전환하고 있습니다. 따라서 이 같은 움직임을 소비와 고용회복으로 원활히 연계시킴으로써 민간수요가 주도하는 자율적 회복궤도로 올려놓을 필요성이 있습니다.

2. 이를 위해서는 무엇보다 민간의 주체적인 노력이 대전제가 되어야 합니다. 기업은 사업의 재편과 합리화를 추진하고 경영자원을 주력 핵심분야에 집중시킴으로써 경쟁력 강화를 위해 한층 더 노력해 나가지 않으면 안됩니다. 세계화, IT혁명의 진전은 새로운 사업기회를 발굴할 수 있는 기회가 됩니다. 기업은 지금이야말로 기업이 정신을 발휘하여 고용을 확대하고 경제신생을 주도해 나갈 필요가 있습니다.

우리 경제체는 지금까지 식유파동을 비롯한 많은 어려움을 겪을 때마다 기지를 발휘, 이를 잘 극복해 왔습니다. 정보화 투자를 비롯해 적극적으로 기업전략을 전개하고 투자에서 소비로 이어지는 경제의 好循環을 구축하면 年率 2.0% 이상의 성장을 실현시킬 수 있을 것입니다. 이 때 관건이 되는 것은 분명 IT분야가 될 것으로 확신합니다. 2001년부터는 대용량 차세대 휴대전화가 상용서비스를 실시하고 인터넷의 보급에 따라 B to B와 B to C와 같은 전자상거래도 비약적인 발전을 이룩할 것으로 보입니다. 2003년의 공중파 방송의 디지털화를 앞두고 방송과 통신이 융합된 서비스도 실시될 전망입니다. 기업에 있어서 IT를 활용한 사업기회는 무한히 확대되고 있습니다.

3. 이와 같이 경제를 자율적인 회복궤도에 올려놓은 후 일본이 해결해야 할 과제는 국민들이 안심하고 생활할 수 있는 사회를 구축하는 일입니다. 이를 위해서는 우선 정부와 지방을 합쳐 총 645조엔, GDP의 약 130%에 달하는 정부채무잔액을 축소시키고 재정적자를 줄임으로써 국민들의 미래에 대한 불안감을 불식시킬 필요가 있습니다. 이미 모리(森) 수상에 대해 내각출범시 세제, 사회보장, 지방재정과 같은 세입, 세출 양 측면에 걸친 포괄적인 재정개혁을 위한 그랜드 디자인을 수립하도록 요청한 바 있습니다.

4. 한편 장기적으로 일본경제를 고려할 때 현재 심각한 사회문제로 부각되고 있는 교육문제의 해결이 매우 중요합니다. 교육은 「국가의 百年大計」이자 개인이 갖고있는 뛰어난 능력을 끌어내어 최대한 발휘하게 함으로써 국민들이 적극적으로 행복을 추구할 수 있도록 유도해 나가야 합니다. 이와 같은 관점에서 경제제도 교육개혁 추진에 노력해 나갈 필요가 있습니다.

아울러 급속한 小子女化 및 고령화에 따른 노동력 인구의 감소문제가 우려되고 있습니다. 경제의 활력을 유지해 나가기 위해서는 각종 기술혁신을 통해 자본과 노동생산성을 향상시켜 나가지 않으면 안됩니다. 이를 위해서는 전략적인 과학 기술정책을 수립하고 정보 및 바이오분야뿐만 아니라 환경, 에너지, 신소재에서 우주, 해양에 이르기까지 폭넓은 분야에서 국민들에게 도움이 되는 기술개발을 위해 힘써 나갈 필요가 있습니다.

經團連은 이와 같은 각종 과제들을 해결하는 일이 일본뿐만 아니라 아시아·대양주 지역경제의 활성화에 기여할 것으로 보고 있으며, 정부와도 협력하면서 문제해결에 힘써 나갈 생각입니다.

【한일 경제관계의 환경정비를 위한 움직임】

1. 다음은 한일 양국의 경제관계에 대해 말씀드리겠습니다. 제작년 10월 金大中 대통령의 방일을 계기로 양국관계는 크게 개선되었습니다. 특히 한국정부가 내놓은 일본문화개방 정책은 진정한 미래지향적인 양국 관계를 구축해 나가겠다는 강력한 의사를 표명하는 것으로써 일본국민들에게 매우 깊은 인상을 심어 주었습니다. 「가깝고도 먼 나라」가 「가깝고도 가까운 나라」로 바뀌었습니다. 일본 문화에 대한 개방정책에 따라 상호 민간차원의 교류를 추진하고 양국의 우호관계가 더욱 증대될 것으로 기대합니다.

경제분야에서는 작년 6월 한국정부가 輸入先多變化制度를 앞당겨 폐지했으며 외환거래자유화도 서서히 추진되고 있습니다. 자유무역협정(FTA)과 관련해서는 지난 달 24일 서울에서 한일공동심포지움이 개최되었다고 들었습니다. 이와 같이 한일 양국의 경제교류를 꾸준히 추진해 나가기 위한 포석이 잇달아 나오고 있습니다.

【한국의 경제구조 개혁과 한국경제의 급속한 회복】

한국에서는 경제계가 중심이 되어 기업경영의 개선 및 투명성 확보 등을 위해 많은 노력을 기울이고 있습니다. 정부에 대해서는 또 자유로운 기업활동을 저해하는 각종 규제완화 및 철폐 등을 요구하고 있다고 들었습니다. 특히 금융분야에 있어서는 경제위기 발생 직후부터 금융기관의 동폐함을 비롯한 각종 제도개혁을 과감하게 추진, 성과를 올리고 있습니다.

이와 같은 다각적인 노력이 결실을 보아 한국경제는 소비와 투자, 수출이 급속히 회복되어 2000년도 연간 GDP 성장률이 8.6%에 이를 전망입니다. 한국경제는 이처럼 위기에서 재빠르게 탈피, 이미 본격적인 회복궤도에 올랐다고 판단되며 경기침체로 장기간 어려움을 겪고 있는 우리로서는 여간 부러운 일이 아닐 수 없습니다.

현재 한국에서 추진하고 있는 기업개혁, 금융개혁 등 일련의 경제구조 개혁이 완료되면 더욱 더 강력한 경제력을 지니게 될 것으로 확신합니다. 경제위기 극복이라는 공통목표를 향해 경제계, 정부, 노조가 하나가 되어 노력하고 있다는 이야기를 들을 때마다 한국의 각계 지도자들의 강력한 지도력과 그에 부응하는 국민들의 '하먼 된다는 정신'에 늘 감탄하고 있습니다.

【양국간 전략적 제휴 추진의 가능성】

이와 같은 상황 속에서 양국기업들은 어떤 분야에서 어떤 형태의 협력이 가능한가에 대해 생각해 보도록 하겠습니다.

일본기업은 해외로 진출할 때 중장기적인 관점에서 서포팅 인더스트리를 육성하는 등 진출상대국 기업과의 신뢰관계 구축을 중시해 왔으며 한국에서도 마찬가지였습니다. 지금 한일 양국의 기업관계는 담당자들이 서로 지혜를 짜내어 공동으로 제품개발을 하고 세계시장에 힘차게 나갈 수 있는 이른바 동반자(equal partner)적인 관계에 있습니다.

양국기업의 협력을 상징하는 것으로는 먼저 양국간 관계에 머무르지 않고 아시아·대양주 지역을 비롯한 세계 시장에서 서로의 강점을 충분히 활용하는 형태로 사업이 추진되고 있는 점을 들 수 있습니다.

둘째는 지금까지 장기간 협력관계를 유지해 온 기업들이 상호관계를 더욱 강화시키기 위한 방안을 모색하고 있는 점이 주목됩니다.

이와 같은 속에서 한국에서는 경제구조 개혁을 원활히 추진하기 위해 적극적으로 외국기업과 제휴해 나간다는 방침을 내세웠으며, 외국인투자 촉진법 제정이 그 예가 되겠습니다. 노사정 간에 합의된 근로자 정리해고제의 도입 등 노사관계의 개선을 위한 노력도 기울이고 있습니다. 이와 같은 움직임은 일본기업에 있어서도 환영할 만한 일이며, 향후 한국에 대한 직접투자에 좋은 영향을 미칠 것으로 확신합니다.

【국제사회에 있어서의 한일협력 확대 가능성】

1. 한일 양국간 기업들이 세계적인 사업전개를 고려하며 협력관계를 구축해 나가고 있는 가운데 이제 우리는 양국의 관계를 보다 폭넓게 다국간 관계 속에서 접근해 나갈 필요성이 있습니다.

구체적으로는 아시아 외환위기로부터 벗어나고 있는 동남아시아 국가 경제의 체질개선을 위해 양국이 솔선하여 기여해 나가는 방안입니다. 저는 금년 3월 19일부터 26일까지 經團連 동남아시아조사단 단장으로 태국과 인도네시아, 싱가포르, 말레이시아를 방문한 바 있습니다. 각국의 정부, 경제계 관계자들과의 의견교환을 통해 아시아 경제는 아직도 성장 가능성이 충분히 있음을 실감하고 돌아왔습니다.

우리는 아시아 경제의 발전은 활력있는 일본경제를 유지하는데 있어서 필요불가결한 것이며, 동시에 일본경제가 활력을 되찾지 못하면 아시아 경제의 건전한 발전도 있을 수 없다는 생각을 갖고 있습니다. 이와 같은 인식에 입각해서 域內 무역과 투자 확대에 노력해 나감과 동시에 각국의 산업경쟁력 강화를 위해 저변 산업과 인재육성을 지원해 나갈 필요가 있습니다. 이 분야에서의 한일 양국기업의 협력이 어느 때 보다 더욱 절실히 요구되고 있습니다.

아시아 域內 무역과 투자 자유화를 위해 한일 양국은 이 지역 국가들에 대해 좀 더 적극적인 자세를 취할 필요가 있으며, 자유화가 추진되면 한일 양국기업의 협력 가능성은 더욱 확대됩니다.

이와 관련해서 말씀드리면 이미 經團連에서는 全經聯 등의 협조를 얻어 동아시아 국가 및 지역의 경제인들이 한자리에 모이는 네이버스 포럼을 개최하고 있습니다. 지금까지 네차례 개최되었는데 아시아 경제의 재생을 위한 방안과 경제위기 재발방지를 위한 아시아의 자본시장 정비, 엔화의 국제화, 세계화 진전 및 기업경영의 방안 등 그 때 그 때에 맞는 의제를 가지고 폭넓은 의견교환을 실시하고 있습니다.

2. 향후 국제무대에서 양국의 협력기회는 더욱 증대될 전망입니다.

작년 11월 시애틀에서 개최된 WTO 각료회담은 순조롭지 못하게 끝나고 말았으나 세계화의 진전 속에서 세계 경제가 건전한 발전을 이룩해 나가기 위해서는 관세인하, 반덤핑 조치의 보호주의적 발동 방지, 전자상거래 취급의 명확화, 지적

재산권 보호강화, 국제적 투자규범 정비, 분쟁처리 절차 강화 등이 차기 WTO 교섭에서 우선과제로 거론될 필요성이 있습니다.

이 점에 대해서는 한국 여러분들도 아마 같은 의견을 갖고 계시리라 생각합니다. 말할 나위도 없이 세계 경제의 지속적인 번영을 위해서는 멀티 톨의 확립이 필요합니다. 포괄적인 라운드 교섭이 하루빨리 실시될 수 있도록 노력하고 교섭이 시작된 이후에도 느슨해지지 않도록 적극 감시해 나갈 필요가 있습니다.

한편, 多國間 무역 규범을 보완하기 위한 방편으로 자유무역협정에 대한 검토도 병행, 실시할 필요가 있습니다. 한국과의 자유무역협정에 대해서는 지난번 발표된 공동연구 결과를 토대로 협정의 장점과 단점을 확인하여 국민적인 컨센서스를 형성해 나가기 위한 노력을 해 나가지 않으면 안되겠습니다.

【향후 한일 양국의 경제관계 촉진을 위하여】

이상에서 말씀드린 바와 같이 한국과 일본과의 관계는 경제분야에 국한해서 보더라도 크게 변화하고 있으며, 상호의존 관계의 정도가 더욱 심화되고 있습니다.

저는 평소 한국과 일본의 관계는 가장 중요한 양국간 관계의 하나라고 주장해 왔습니다. 지금까지 구축해 온 관계를 더욱 확고히 다져 다음 세대들에게 전해줄 수 있도록 함께 힘을 합쳐 나갈 필요가 있습니다.

그런 의미에서도 이 한일·일한경제인회의는 매우 중요한 자리이자 앞으로도 양국의 경제계가 서로 힘을 합쳐 발전시켜 나가지 않으면 안됩니다.

이번 회의가 어느 때 보다 더욱 많은 결실을 맺을 수 있기를 기원하면서 인사말씀을 마치겠습니다. 감사합니다.

〈韓國側 基調演說〉

새천년 아시아 經濟비전을 위한 韓日經濟人 構想 “A Vision for Korea-Japan Business Relation in the 21st Century”



全國經濟人聯合會
會長 金 珪 中

존경하는 후지무라 마사야(藤村 正哉) 會長님과 김상하(金相廈) 會長님, 그리고 韓日 經濟人대표 여러분.....!

바로 전에 우리는 經團連 이마이 타카시(今井 敬) 회장님의 基調演說을 傾聽했습니다. 이마이(今井) 會長께서는 이제 日本經濟도 沈滯의 긴 터널에서 벗어나, IT(Information technology)技術에 바탕을 둔 새 産業으로 힘차게 나가고 있음을 밝혔습니다. 매우 鼓舞的인 말씀입니다. 여기까지 오는데 힘쓰신 日本經濟人과 關係人士들에게 이 자리를 빌어 祝賀의 말씀을 드립니다.

本論에 들어가기 전에 지난 5月 14日 돌아가신 오부치 게이조(小淵 惠三) 總理에게 우선 심심한 弔意를 표합니다. 逝去하시기 直前까지 오부치 總理는 日本經濟의 回復과 再跳躍을 위해 勞心焦思하셨습니다. 항상 庶民의 위치에서 謙遜한 微笑를 지녔고, 이웃나라 우리에게도 親近感을 주신 분이었습니다. 이 분의 急逝에 대해 悲痛한 心情을 표할 길 없습니다. 이 자리를 빌어 오부치 總理 遺族과 日本國民에게 다시 한번 깊은 哀悼의 뜻을 표합니다.

1969년부터 每年 開催된 ‘韓日經濟人會議’는 올해로 어언 32年째를 맞았다고 합

니다. 사실 韓日經濟人들의 본격적인 接觸은 이보다 훨씬 以前부터였습니다. 61年 9月 우에무라 코고로(植村 甲午郎) 會長 一行 訪韓, 연이은 62年 12月 安藤 豊祿, 63年 10月 安西 正夫, 그리고 65年 4月 도쿄 토시오(土光 敏夫) 등을 團長으로 하는 視察團이 來韓했습니다. 그리고 66年 2月 東京 經團連 會館에서 당시 이시자카 타이조(石坂 泰三) 經團連 會長과 韓國側 김용완(金容完) 會長을 대표로 하는 韓日合同經濟懇談會가 개최되었습니다. 이들 兩國 經濟指導者들은 韓日經濟協力과 國交正常化에 先導的 役割을 했습니다. 本人은 이들 兩國 指導者의 先見과 指導力에 큰 感銘을 받고 있습니다.

이 韓日經濟人會議는 양국간의 交易, 技術交流, 投資協力 등의 큰 媒介體가 되었고 두 나라 經濟發展에 지대한 貢獻을 해왔습니다. 이 자리를 빌어, 先輩經濟人들의 勞苦에 마음으로부터 敬意를 표하는 바입니다.

사실 日本은 그간 世界 2位の 經濟大國이 되었고 韓國 또한 世界에서 열두번째 經濟國家로, 주목할 發展을 이룩했습니다. 이는 여기에 계신 韓日 兩國 經濟指導者들의 奮闘의 結果라고 생각하며, 本人은 수고가 많으셨다고 말씀드리고 싶습니다.

여러분이 아시다시피 아시아는 世界에서 가장 活力에 넘치는 地域입니다. 아시아 사람들은 꿈에 부풀어 있습니다. 아시아 政治家나 經濟人은 새 世紀에 알맞은 틀을 짜기 위해 東奔西走하고 있습니다. 특히 經濟人들은 國民에게 일터를 더 많이 만들어 주고, 더 富強해질 수 있는 21세기형 産業創出에 애쓰고 있습니다.

日本 모리 요시로(森 喜朗) 總理는 바로 엊그제 서울에서 南北頂上會談을 앞둔 김대중(金大中) 大統領과 새로운 韓日 파트너십을 隔意없이 協議했습니다.

현재 日本과 北韓의 修交交渉도 이루어지고 있습니다. 때마침 北韓은 아세안 地域安保포럼(ARF ; ASEAN Regional Forum)에 參加하게 되었습니다. 이와 같은 一連의 接觸과 變化를 통하여, 미지않은 將來에 北韓도 책임있는 國際社會의 一員이 되기를 조심스럽게 希望하게 됩니다.

곧 이어질 7月の 오키나와(沖繩) G8 頂上會談과 10月の 서울 ASEM會議에서 우리 亞細亞가 地球次元의 問題들 함께 解決해 가는 글로벌 파트너임을 보여줄 수 있을 것입니다.

아시아 頂上들의 親密한 關係維持못지 않게 아시아 經濟人들의 緊密한 事業協力 또한 重要하다고 생각합니다. 전 世界的으로 이미 119개에 달하는 雙務的인 地域協定이 存在하는 것은 政府와 民間, 實物과 金融, 國民과 企業 모두가 經濟協力の 主體가 되어가고 있음을 意味합니다. 日本 政府는 싱가포르와 自由貿易協定締結을 적극 推進하고 있으며, 韓國政府도 칠레와 自由貿易協商을 마무리짓는 段階에 있습니다.

1999年 11月 韓國, 中國, 日本 세나라 頂上이 '3國間 經濟協力에 관한 共同研究'에 합의한 以後, 근자 學界에서는 韓日間 自由貿易推進案을 提示하고 있습니다. 또 東北亞經濟協議體 構成을 위한 多樣한 研究가 進行되고 있는 것으로 들고 있습니다. 日本과 中國 그리고 韓國 세 나라의 經濟規模가 이미 世界經濟의 1/5, 貿易規模와 人口規模는 1/4 정도임을 勘案할 때 NAFTA나 EU에 못지 않은 열린 地域經濟體制의 可能性을 엿볼 수 있습니다.

그러나 아시아의 現實은 좀 더 冷徹한 認識과 지혜로운 시스템구축을 필요로 합니다. 지금까지 우리는 아시아 域內에 협력의 장을 마련하려는 노력이 매우 未洽했습니다. 美國이나 유럽國家들에 비해 經濟發展段階가 늦었기 때문에 先進國 市場에서 外貨를 벌어 經濟發展을 추구하는 輸出主導經濟를 운영해 왔습니다. 先進國들이 아시아의 商品을 사주는 동안에는 輸出主導成長戰略이 성공적이었습니다. 그러나 美國이 1999年 한해에 3,375억 달러의 經常收支赤字를 기록하고 EU가 經濟 및 貨幣統合을 이룩하고 있는 現時點에서 아시아 國家에 더 이상 輸入市場을 확대해 주리라는 것은 期待하기 어렵습니다. 이는 앞으로 아시아 안에서 아시아의 市場을 더욱 찾아야한다 것을 意味합니다.

더구나 아시아 經濟는 지난 1997年 金融危機를 겪었고, 현재는 經濟活力 面에서 어느 정도 回復된 듯 보이나 根本的인 問題는 아직도 解決되지 않고 있습니다. 成熟産業部門에서의 심각한 過剩施設 問題는 韓國을 비롯하여 아직 남아있습니다. 아시아의 製造業 過剩施設 問題는 生存을 위한 피할 수 없는 結果라고도 할 수 있습니다.

뒤늦게 世界市場에 뛰어든 아시아 나라들은 産業發展過程에서 外國商品을 싼 價格으로 대체하면서 世界를 향한 수출드라이브정책을 펼쳐왔습니다. 또한 日本을 제외하고는 시간이 걸리는 技術開發보다는, 規模의 利點(merit)에 의한, 生産單價 引下를 위해 生産施設을 늘렸고, 經濟發展에 필요한 資金의 많은 부분을 歐美資本에 依存해왔습니다. 때문에 輸出採算性이 나빠지면 生存을 위해 短期性投機資金이라도 매달릴 수밖에 없는 脆弱한 經濟·金融構造를 갖고 있습니다.

아시아의 運命은 새롭게 開拓돼야 합니다. 원대한 비전으로 새 産業을 創造하고 先進國과 競爭을 하면서 아시아 全體를 글로벌 協力の 파트너로 格上시켜야 합니다. 아시아 域內에서도 自律的인 成長이 可能的인 自生力있는 메커니즘을 構築해야 합니다. 그리고 世界的인 경제經濟秩序 形成에 아시아의 목소리를 높이고 說得力있는 論理로 協商力을 強化시켜야 할 것입니다. 이와 관련하여 우리는 日本의 役割을 期待하게 됩니다.

아시아의 潛在力을 새롭게 보는 눈을 가져야 합니다. 日本, 韓國, 中國의 産業化 段階는 분명 서로 다릅니다. 그러나 情報化 段階는 産業化 順序를 꼭 따르는 양을 것입니다. 아시아 여러 나라들의 經濟發展 段階가 相異할지라도 個別國家의 經驗, 知識, 그리고 情報蓄積을 어떻게 조합하고 활용하느냐에 따라 새로운 시너지 效果를 發揮할 수 있으리라 봅니다.

현재 韓國의 實物經濟는 아시아 外換危機 前의 상태로 回復되었지만 위에서 지적한 대로 여러 가지 問題가 남아있습니다. 金融機關의 不實債權과 過剩狀態에 있는 企業들의 債務, 設備, 人力의 調整 등 難題가 많습니다.

또 있습니다. 韓日間의 懸案으로 남아있는 貿易逆調問題를 제기하고자 합니다. 이 問題를 打開하기 위한 종래와 次元을 달리하는 共同努力이 切實하다고 생각합니다. 이를테면, 양국간 部品, 素材産業 提携·技術共同開發體制를 具體化해야 할 것입니다. 이번 會議를 통하여 貿易逆調 是正을 위한 實踐計劃이 나왔으면 합니다.

激變期에 처한 우리 경제인들은 思考의 轉換이 必要합니다. 韓國과 日本이 自動車, 半導體, 鐵鋼, 石油化學, 造船, 이동통신, 단말기 등 規模나 技術水準은 差異가 있으나 비슷한 産業構造를 가지고 있습니다. 中國이 類似한 産業構造로 나간다면 아시아 域內 國家間의 競爭은 더욱 激化될 것입니다.

앞으로 다가올 競爭激化를 피하기 위해서도 南韓과 北韓, 中國과 日本이 4개국을 하나의 經濟圈—東北亞經濟圈—으로 묶는 試驗을 생각할 수 있습니다. 이로써 效率的인 分業構造와 디지털 經濟時代의 새로운 協力關係를 豫想할 수 있을 것입니다. 또한 아세아 안에서 새로운 비즈니스 모델을 創出할 수 있습니다. 이는 어디까지나 우리 經濟人이 가질 수 있는 하나의 꿈이며, 目標라고 하겠습니다. 그러나 결코 虛荒된 것은 아니며 ‘可能性’을 提示하는 것이라 하겠습니다. 문제는 이 難題를 實現시킬 수 있는 우리 韓·日·中 政治·經濟指導者들의 비전, 결의, 그리고 끊임없는 노력에 달려 있습니다. “천리길도 한걸음부터”라는 東洋의

叡智가 있습니다.

근자에 韓·日·中과 東南亞聯合(ASEAN)의 財務長官들의 합의한 “通貨交換(SWAP)協定”은 이 地域協力の 큰 進展이자, 우리의 원대한 構想을 위한 뜻있는 巨步라 생각합니다.

日本·中國·泰國 東北亞 三國의 총외화보유고는 5,000億 달러이상입니다. 싱가포르 등 東南亞를 합치면 8,000億 달러이상이라고 합니다. 필요시 이 외화보유고의 10%만이라도 서로 融通하여 사용한다면, 지난 IMF危機의 主犯이라 할 世界投機資金의 橫暴을 막을 수 있을 것입니다. 뿐만 아니라, 그간 論難이 많았던 아시아 域內 通貨協力體制의 土臺가 構築되어 가는 것이라 本人은 생각합니다.

지나친 樂觀論은 國際問題를 다루는데 禁物입니다. 人間事나 國際關係는 항상 明暗이 따르기 때문입니다. 때로는 魔도 짊 수 있습니다.

東北아시아에서 21世紀 최대의 難題를 舉論하지 않을 수 없습니다. 이는 바로 이 地域의 環境問題입니다. 이번 合同會議 議題에도 環境問題가 들어 있었습니다. 내일 合同會議에서 구체적으로 討議될 것으로 期待됨으로 本人은 ‘環境’문제의 深刻性을 제기하는 선에서 그칠까 합니다.

문제의 ‘現實性과 深刻性’을 부각시키기 위해 바로 한달 전에 韓日 兩國 畜産과 肉類 加工業에 큰 충격을 준 “口蹄疫”을 상기시키고자 합니다. 中國으로부터의 黃砂가 口蹄疫 바이러스의 유력한 전파원으로 지목되었습니다. 國際의으로 확인 작업이 進行되고 있으나 中國은 노여움과 불쾌감을 표시한다고 듣고 있습니다.

21世紀 東北亞의 最大課題이자 긴급한 難題인 環境問題의 特性을 強調하는 意味에서 새삼 想起코자 합니다.

첫째로, 지금 우리가 當面한 東北亞의 環境問題는 韓·日·中 三國의 現存하는 國境을 무의미하게 하며 汚染과 被害의 영역을 擴張시키는 것입니다.

둘째로, 바로 “口蹄疫”波動이 보여주듯이 原因糾明의 불확실성으로 인한 原因提供者와 被害者간의 責任所在 判明이 어렵다는 것입니다.

셋째로, 問題解決을 위해 國家간의 協力이 절대 필요하나, 獨立國家의 屬性에서 緣由하는 自國爲主政策은 國家간의 協力を 더욱 어렵게 한다는 점입니다.

특히 세계에서 經濟成長이 제일 빠른 中國 등 東北亞는 公害배출량이 불행히도 세계 으뜸입니다. 그렇다고 公害 때문에 中國의 經濟成長을 늦추라고 누구도 말할 수 없습니다. 그러나 12억 人口와 工場 등이 사용하는 石炭消費량은 2020년까지 現在의 두배 내지 세배가 될 것이라고 專門家들은 豫測하고 있습니다. 이와 관련하여 時事評論家들은 中國, 東北亞 環境問題를 全 人類次元의 關心事로 다뤄져야 한다고 주장하고 있습니다. 한반도의 西海 즉 黃海는 ‘汚染으로 인한 죽음의 바다로 轉落해가고 있다’고 專門家들은 警告한지 오래입니다.

韓日兩國 經濟人 여러분.....!

이에 우리는 어떻게 對處할 것인가....?

結論부터 말씀드리면, 中國·日本·韓國 3國의 共同對應이 절실합니다. 環境問題 解決 없는 經濟成長은 ‘砂上樓閣’보다 더 심각한 結果를 招來할까 憂慮됩니다. 따라서 韓·日·中은 遲滯없이 ‘環境問題’에 대한 ‘共同認識’, ‘財源과 技術’의 共同分擔에 기초한 21世紀 超長期計劃을 樹立해야 한다고 생각합니다.

다행히도 日本企業들은 이미 黃砂의 진원지인 고비사막에 植樹를 시작했습니다. 中國도 50年 長期計劃으로 이 地域 植樹를 막 시작했다고 전하고 있습니다. 이를 國家間 協力次元으로 높이고 擴大시키는 것이 切實합니다. 이와 관련하여 1999年 시작한 韓·中·日 環境長官會議을 보다 具體적이고 實踐的인 案들을 産出하는 모임이 되도록 해야 할 것입니다.

우리 韓日 兩國 經濟界도 한층 이 問題의 深刻性を 再認識하고 보다 적극적으로 同參해야 할 것입니다. 本人은 韓·日·中 3國 經濟人들이 政府와 緊密한 提携下에 3國間의 環境問題協議機構를 創設해야한다고 생각합니다.

韓日經濟人會議의 歷史는 한 세대를 넘길 만큼 敦篤해지고, 여기에 參席하고 있는 우리들의 나이도 高齡化되었습니다.

우리의 世代에서 우리가 誠實하게 쌓은 經濟協力の 傳統이 産業社會를 넘어 知識·디지털 社會에도 이어가도록 새로운 傳統을 만들어야 할 것입니다. 우리의 次世代 經濟人들이 이 모임에서 새로운 이슈를 발견하고 協力方案들을 具體化시킨다면 韓國은 日本에게, 그리고 日本은 韓國에게 代替이 중요하고 필요한 協力파트너가 될 것입니다. 經團連 이마이(今井) 會長이 基調演說에서 이미 IT경제 시대의 韓日關係를 言及하셨습니다. 또한 文化交流의 重要性도 강조하셨습니다.

본인은 이와 더불어 엄청난 速度로 진행되는 IT技術發展에 적응할 從業員들을 위한 새로운 教育訓練部門에서도 兩國의 協力이 切實하다고 생각합니다.

유럽國家들의 變化를 보십시오. 또한 유럽靑年들은 최소한 英·獨·佛 3개국에 能通하다고 합니다. 相好文化에도 親熟합니다. 우리도 이들을 본받아 다음世代 經濟人들이 英語뿐만 아니라 日本語, 韓國語, 中國語를 모두 할 수 있는 機會를 적극 마련하고, 서로의 文化에 親熟할 수 있는 機會와 投資도 아끼지 말아야겠습니다.

디지털 經濟, IT-eB時代의 韓日協力問題와 새로운 課題들이 판도라 상자 속에서 튀어나오고 있습니다. 시간관계상 이들의 具體的 內容은 다음 機會로 미루고자 합니다. IT-eB時代는 문자그대로 새로운 革命입니다. 이 時代에는 우리의 思考·制度·慣行 그리고 組織에 있어서도 일대 變革을 가져올 것입니다. 人類史的 激變期에 適應할 諸般 아이디어와 새로운 構想들을 우리는 한걸음 앞서가시는 日本 經濟人들에게서 期待하고 배우려고 합니다.

오늘 다시 韓日 兩國의 經濟人들이 한 자리에 모였습니다. 서로 다른데서 일하고 있지만 한 자리에 모이면 마음이 같아집니다. 앞으로 젊은世代들이 더 많은 새로운 知識을 가지고 이 자리에 모인다면 우리가 시작한 韓日經濟協力は 世代를 넘어 21世紀의 새로운 傳統으로 이어질 것입니다. 東北亞 經濟共同體의 胎動을 우리世代가 이룩했다는 歷史的 記錄을 남깁시다. 힘을 합칩시다.

감사합니다.

全體會議 ①

〈全體會議 ①〉

一 般 經 過 報 告

社團法人 日韓經濟協會
專務理事 村上 弘芳

일반경과보고에 대해서는 한일·일한경제협회 두 사무국의 사전협의에 따라 이 제32회 한일·일한경제인회의로부터 회의의 간소화와 효율화를 위해 서면으로 아래와 같이 보고 드리기로 결정되었기에 양해바랍니다.

작년 4월, 한국의 서울특별시에서 개최된 제31회 한일·일한경제인회의에서의 각 합의사항의 실천현황 및 그와 관련된 양국간의 협력사업 등에 대해 보고 드리겠습니다.

그리고 제1회 한일·일한산업무역회의(개최국:일본) 및 제17회 한일·일한중견중소기업위원회(개최국:한국)에 대한 보고는 각각 경제인회의의 주최국측인 아키야마 도미이찌(秋山 富一) চে어맨과 칸노 도시노리(管野 利德) 위원장께서, 제10회 한일·일한중견경제인교류촉진단(수용국:일본)에 대해서는 일본측의 아소 유타카(麻生 泰) 단장님께서 오늘 본 회의에 출석하시기가 어려워 한국측의 薛元鳳 단장님께서 이 회의에서 보고하시기로 되어 있기 때문에 이 일반경과보고에서는 생략하겠습니다.

1. 訪日輸出促進團의 件

본 사업은 한일·일한 양국 市場協議會의 주관으로 실시되는 것이며, 양국 시장협의회의의 사무국은 일본측은 일본무역진흥회가, 한국측은 한일경제협회가 각각 맡고 있다.

작년에는 한국에서 3회, 총 65개사, 99명이 일본을 방문, 상담건수는 1,033건에 달하여 대일 수출의 확대에 기여하였다.

(상담회 개요)

次數	期 間	業 種	訪問地域	規 模	商談件數	備 考
1	6. 21 ~ 6. 26	纖 維, 消費財	東京, 大阪	28個社 (39名)	391件	
2	8. 31 ~ 9. 4	膳物用品	東京	10個社 (21名)	494件	기프트쇼
3	11. 15 ~ 11. 19	纖維, 消費財 農水産食品	秋田, 青森	27個社 (39名)	148件	
合 計				65個社 (99名)	1,033件	

2. 産業技術協力財團의 件

양국의 산업기술협력재단에 의한 한일산업협력사업은 1993년부터 시작되어 이제 만 7년을 경과하였다.

그간 한국의 정치, 경제의 큰 변화에 즉시 대응하며 양국의 정부, 관련경제단체 및 기업의 많은 분들의 전폭적인 지원과 협력을 얻어 적극적이고도 광범위한 활동을 계속해 왔다.

작년에도 양국의 재단은 각각 산업기술인재육성사업, 생산성향상협력사업, 각종 교류사업, 세미나의 개최, 기술상담회(테크노마트)의 개최, 조사홍보사업 등 폭넓은 활동을 두 재단의 공동사업과 함께 실시하였다.

이외에도 양국정부간의 협의에 기초한 한국에서의 한국투자유치사절단, 일본에서의 투자환경조사단의 파견·수용을 지원·협력하여 한국경제 회복에 대한 기대와 신뢰 향상에 크게 기여했다는 평가를 받았다.

3. 靑少年交流事業의 件

1985년 이후 여름방학기간을 이용해 실시하고 있는 청소년교류사업에 대해서는 작년 한국에서 32명이 일본을 방문했고 일본에서는 20명이 내한하였다.

한일 양국의 학생들이 7박 8일의 체류기간동안 홈스테이, 양국학생교류, 유적이나 문화산업시설의 견학을 통해 폭넓은 상호이해와 우호친선을 증진시킬 수 있었다.

4. 第1回 APEC投資博覽會에 대한 協力の 件

제1회 APEC(아시아태평양경제협력회의)투자박람회가 6월 2일에서 5일까지 서울 시내의 COEX(한국종합전시장)에서 개막되어 APEC역내 21개국에서 3,000명 이상(일본에서는 500명 이상)의 정부관계자, 민간투자가 등이 참가한 가운데 성황리에 폐막되었다.

이 박람회는 1998년 11월에 말레이시아의 쿠알라룸푸르에서 개최된 APEC정상 회담에서 APEC역내 국가간의 투자확대를 통한 아시아국가의 경제위기의 극복과 투자활성화를 목적으로 金大中 대통령에 의해 제창된 것이다.

일한경제협회의 후지무라 마사야(藤村 正哉) 회장은 한국정부의 요청으로 도요타자동차(주)의 도요타(豊田) 회장과 함께 방한하여 개막식(Tape Cutting), 개막오찬회, 특별강연 등의 주요행사에 참석하였다. 또한 후지무라 회장은 도요타 회장, APEC지역대표관계자와 함께 金大中 대통령을 예방하여 전시회 등을 참관했다.

5. 후지무라 마사야(藤村 正哉) 會長の 「産業勳章」受賞을 위한 訪韓 件

후지무라 회장은 한국의 산업발전에 크게 기여한 공적을 높이 평가받아 작년 10월 27일 방한하여 청와대에서 金大中 대통령에게서 영예로운 「銀塔産業勳章」을 수상하였다.

6. 部品・素材産業投資交流미션의 件

「부품·소재산업투자교류미션」은 일본의 對韓 투자유치 및 한일기업의 전략적 제휴가 중요하다는 인식을 공유하는 한일 양국정부가, 12월 16일에 개최된 제2회 한일민관합동투자촉진협의회에서 부품·소재산업분야의 일본민간기업에 의한 방한미션 등의 파견에 합의한 것으로, 일본의 통상산업성 및 통산성의 요청을 받은 (재)일한산업기술협력재단과 (사)일한경제협회에 의해 부품소재관련의 중견·중소기업을 중심으로 총 46명의 미션이 구성되어 3월 21일부터 23일까지 서울근교의 부품·소재산업 전용단지 등을 시찰하였다.

7. 訪日 韓國 主要人士의 歡迎會

(1) 金鍾必 국무총리 환영오찬회

일한경제협회는 방일한 金鍾必 국무총리의 환영오찬회를 작년 9월 2일 東京에서 일한협력위원회, 經團連 외 일본의 주요경제단체와 함께 개최해, 이에 후지무라 회장 이하 회원이 참석하였다.

(2) 鄭德龜 산업자원부 장관 환영오찬회

일한경제협회는 鄭德龜 산업자원부 장관의 환영오찬회를 작년 12월 15일에 東京에서 개최해, 이에 후지무라 회장 이하 회원이 참석하였다.

韓日・日韓産業貿易會議 報告



日韓産業貿易會議
체어맨 秋山 富一

산업무역회의의 일본측 체어맨을 맡고 있는 아키야마라고 합니다.

작년 10월 14, 15일의 이틀간 치바현(千葉県) 기사라즈(木更津)市の 「카즈사아카데미아파크」에서 개최된 「제1회 한일・일한산업무역회의」에 대해 보고 드리겠습니다.

이 산업무역회의는 작년 4월에 개최된 제31회 경제인회의에서 한일 양국이 공동으로 신설을 제안함에 따라 만장일치로 발족된 것입니다.

이때 제안된 설립취지에 대해 다시 간단히 설명 드리면, 「새로운 산업무역회의는 기계공업이나 무역투자와 관련된 전문분야에 대한 접근도 계속하면서, 보다 넓은 관심분야에 대한 인식의 공유와 합의 형성을 위한 정보와 의견교환의 장이며, 동시에 경제인회의에서의 논의를 뒷받침하고 혹은 그것을 발전시켜 나가기 위한 경영자와 young executive에 의한 연구의 장」이라는 것입니다.

그 후 한일 양국의 사무국에서는 각각 위원을 선출했는데, 일본측에서는 일한경제협회의 이사회사 중 24곳의 회사 및 단체에서 모두 48명의 정·부위원을 선정, 제가 체어맨에 취임하였고, 코디네이터에 이시카와지마하리마(石川島播磨)중공업의 부회장이 취임하였습니다.

한국측은 체어맨에 한국무역협회의 강만수 상근부회장님이 취임하셨고, 코디네이터에는 산업연구원 경제자유센터의 김도형 소장님이 취임하셨습니다. 또한 정 위원으로서 통합 전의 세 전문위원회, 즉 무역투자위원회, 기계공업위원회 및 산업일반위원회의 각 위원 소속사 10개사에서 30명, 그리고 기계공업위원회를 구성하는 한국기계공업진흥회의 회원사 16개사가 부위원으로 선출되었습니다.

지금까지 세 전문위원회의 사무국을 담당하셨던 한국무역협회, 한국기계공업진흥회, 한일경제협회의 노고에 경의를 표함과 동시에, 이 새로운 산업무역회의의 간사사무국을 담당하시는 한일경제협회를, 한국무역협회, 한국기계공업진흥회의 두 단체에서 계속 지원해 주시고 협력해 주실 것을 부탁드립니다.

참고로 말씀드리면 이 산업무역회의에서는 한일 양국에서 각각 대표자의 호칭을 「의장」 혹은 「위원장」, 아니면 「대표위원」으로 하자는 등의 안이 나왔습니다만, 글로벌시대의 회의에 걸맞게 「체어맨(chairman)」과 「코디네이터(coordinator)」로 결정되었습니다.

제1회 「한일·일한산업무역회의」에는 일본측에서 32명, 한국측에서 26명의 위원이 참가하였습니다. 이틀간에 걸친 회의는 회의의 설립취지에 따라 폭넓은 관심분야에 대한 인식의 공유와 합의 형성을 위한 정보와 의견교환의 장으로서, 별도로 구체적인 결론을 도출해내지는 않고, 개인의 입장에서 자유롭게 솔직한 의견교환이 이루어졌습니다.

그럼 의견교환에서의 주요 포인트에 대해 보고 드리겠습니다.

먼저 첫날 제 1세션에서는 양국경제의 현황에 대한 인식을 목적으로, 일본측에서는 경단련의 다찌바나 히로시(立花 宏) 상무이사가 「일본에 있어서의 산업경쟁력 강화에 대한 노력」이라는 주제로, 작년 3월에 발족한 「산업경쟁력 회의」의 활동상황을 보고하셨습니다.

또 한국측에서는 LG경제연구원의 이지평 부연구위원이 「한국기업의 경제개혁과 한일협력방안」이라는 제목으로 발표를 하셨습니다.

이에 대해 한국측에서 기본적인 포인트로, 일본의 구조개혁은 단순한 重厚長大 大型의 산업을 연명시키려고 하는 것인가, 아니면 새로 고부가가치산업으로 이행시키려고 하고 있는 것인가 라는 질문을 하셨습니다. 일본측에서는 이에 대해, 중후장대형의 산업은 앞으로도 일본에게 필수적인 것이며 쇠퇴하거나 소멸하는 것이 아니라 보다 고부가가치형으로 전환하는 것이라는 점, 또한 산업경쟁력 회의가 정부에게 요청하는 것은 산업구조 개편이나 기업조직 개혁이 다른 나라만큼 추진하기 쉬운 환경을 정비하는 것이지, 글로벌스탠더드를 벗어나서 일본만을 특별대접해달라고 하는 것은 아니라는 코멘트가 있었습니다.

이외에도 일본측의 구조개혁의 구체적인 내용에 관한 설의나 한국측의 잠재성

장력, 社外理事制度의 현황, 노동력의 유동화, 경영의 투명성, 벤처비즈니스, 무역수지 등에 대해 양국 위원간에 열띤 토론이 이루어졌습니다.

그 다음 날의 제 2세션에서는 「한일양국의 기업풍토와 상관습」을 주제로 토론이 벌어졌습니다. 이 세션을 시작하기에 앞서 일한경제협회의 무라카미 히로요시(村上 弘芳) 전무이사가 본 테마 설정의 경위 및 「한국의 상관행에 관한 일본기업공청회조사결과」에 대해 보고하셨습니다.

한국측에서는 주일한국기업연합회의 김대욱 회장님의 「일본의 기업문화와 상관행」(부제 「일본경제계에 바란다」)에 대한 보고가 있었습니다.

한국측이 일본의 독특한 관행이라고 지적한 「일본주식회사」나 「계열거래」에 대해 일본측에서는 현재로서는 실태가 없다는 코멘트를 했습니다만, 한국이 일본을 보는 시각을 알 수 있었습니다.

일본측에서는 한국에서 비즈니스를 할 경우 일본기업 특유의 노사관계와 세금 문제가 여전히 큰 문제라고 생각하는 기업이 많다는 점을 지적했습니다. 그리고 최근에는 많이 개선되고 있지만 계약이나 납기에 관한 인식이 충분하지 못하다는 지적도 있었습니다. 이에 대해 한국측에서는 한국의 상관습상의 문제점은 개선해갈 필요가 있다고 코멘트하셨습니다.

일본측이나 한국측이나 서로 지적 받은 점을 겸허히 받아들여 바람직하지 않은 상관행은 시정해갈 필요가 있다고 느꼈습니다.

또 한일 양국의 위원들이 이 문제에 대한 전제로서 「글로벌스탠더드」의 정의에 대해 많은 의견을 내주셨는데, 투명성과 accountability(설명책임)를 행동기준으로 삼을 것, 현실적으로 미국식의 스탠더드를 받아들이지 않을 수 없다는 것이 다수의 의견이었습니다.

이들간의 토론을 통해 특기할 점은 한일 양국의 위원이 솔직하고 진지하게, 끝까지 침착하게 의견을 교환하여 인식을 공유할 수 있었다는 점입니다.

더불어 저는 다음 두 가지 점이 인상 깊었습니다.

하나는 서로 상대국의 商慣行의 문제점을 지적했는데, 결국 글로벌스탠더드에서 얼마나 벗어나 있는지를 전제로 문제점이 지적되었다는 점입니다. 즉 양국의 전통적인 사고방식이나 가치관, 말하자면 각각의 문화를 비판하거나 그 수정을 요구한 것이 아니라 국제적인 거래나 투자의 세계에서는 글로벌스탠더드라는 기준과의 괴리에 어떻게 대처하는지에 대한 문제라는 공통된 인식을 참가자 모두가 가지고 있었다는 것입니다.

두 번째는 한국은 경제위기를 극복해 가는 과정에서 글로벌스탠더드에 대한 인식이 경제계의 상당히 깊은 곳까지 침투되어 있다는 점입니다. 한국정부의 강력

한 리더쉽 덕에 기업경영자부터 각층의 지도적인 입장에 있는 사람들의 의식이 변화된 것이라는 생각을 했습니다.

회의 마지막의 제 3세션에서는 「앞으로의 회의 운영 등에 대해」 자유토론이 이루어졌습니다. 이번이 첫 회의이고 실험적인 의미도 있었기 때문에 다음 번 이후의 회의 운영에 참고하기 위한 의견교환이었습니다.

한국측에서는 본 회의 중에 운영위원회나 TASK FORCE를 설치하자는 안, 제안기능을 부여해야 한다는 등의 의견도 있었습니다.

일본측에서는 본 회의 설립의 취지에 따라 참가위원들의 자유로운 입장을 존중한 의견교환과 정보교환이 우선이 되어야 한다는 의견이 나왔습니다.

최종적으로는 당초의 목적에 포함된 「인식의 공유」를 키워드로 당분간 운영해나가는 것으로 양국위원은 의견의 일치를 보았습니다.

한일산업무역회의에서는 공동성명을 발표하는 것은 아닙니다. 그리고 합의사항, 결의사항도 없습니다. 그러나 양국의 위원이 자유롭게 솔직한 토론을 진지하게 벌일 수 있었다는 것이 최대의 수확입니다. 앞으로도 이런 분위기, 이런 정신으로 산업무역회의를 계속해나갔으면 하는 바람입니다.

제2회 회의는 올 가을에 한국에서 개최될 예정입니다만, 새로이 한국측 채어맨에 취임하신 한국무역협회의 趙健鎬 상근부회장님을 모시고 제1회 때와 마찬가지로 유익한 회의가 될 것으로 기대합니다.

그리고 이것은 여담입니다만, 회의석상에서, 다음 회의는 금강산유람선에서 개최하자는 제안이 있었음을 말씀드리며 제 보고를 마치겠습니다.

韓日・日韓中堅中小企業委員會 報告



日韓中堅中小企業委員會
委員長 菅野 利德

방금전 소개받은 일본측 위원장을 맡고있는 전국중소기업단체중앙회 전무이사 칸노(菅野)입니다. 중견중소기업위원회의 활동에 대해 보고 드리겠습니다.

제18회 일한·한일중견중소기업위원회 합동회의는 금년 3월 28일 및 29일, 서울의 중소기업협동조합중앙회에서 개최되었는 바, 양국에서 29명이 참가하였습니다.

첫날 일정은, 양국의 위원장의 인사말, 한국측 이원호 위원장의 제17회 합동회의의 경과보고 및 이후 전체회의 I에서 『새천년 일·한 양국중소기업의 공존공영 방안』에 대한 발표와 자유토의, 전체회의 II에서 『향후의 일한·한일 중견중소기업위원회의 나아갈 방향』에 대한 의견발표와 자유토의가 있었습니다.

전체회의 I에서는 한국측의 건국대 경영학과 이윤보 교수가 『새천년 한·일 중소기업의 공영방안』을 의제로 일·한 양국간의 경제협력과 중견중소기업간의 협력증진 방안에 대해 협력관계의 연혁을 근거로, 정보화예의 대응, 이업종교류의 확대, 벤처기업 육성을 위한 협력 등에 대해 언급하였습니다.

일본측 중소기업대학교 동경교 이또나오기(伊藤直樹) 제2경영 연구지도실장은

『일본의 중소기업 지원정책의 특징과 공존공영을 위한 방안에 대해』를 의제로 정부의 벤처기업 등 창업지원 방안을 중심으로 한 중소기업정책의 전면적 재조명에 대한 설명과 일·한간 현황에 대해 비교하면서 중소기업 신제품개발 체제 등의 사례를 설명하고, 아울러 기업간 정보교류촉진방안, 지방도시 활성화, 편의점의 발전과 관련사업을 예를 들어 향후 양국간 협력가능성을 언급하였습니다.

자유도의에서는 일본측으로부터 일본 중소기업의 연구기술 개발에 대한 지원방안을 소개하였으며, 양국 위원간의 일·한 양국 벤처기업의 육성과 현황비교, 중소기업조합의 현황 등에 대해 활발한 의견교환이 있었습니다.

전체회의 II에서는 『향후 일한·한일중견중소기업위원회의 나아갈 방향』에 대해 한국 중소기업협동조합중앙회 홍순영 상무이사로부터 당 위원회의 현재까지의 경과를 언급하면서, 당 위원회 위원구성의 불일치, 회의개최에 앞선 사전조정의 필요성 등에 대한 문제제기가 있었고, 한국측 사무국이 중소기업협동조합중앙회인 점에 대응한 형태로 일본측 사무국을 전국중소기업단체중앙회로하면 좋지 않을까 라는 의견이 있었으며, 이 같은 개선의 일환으로 당 위원회를 양국 중견중소기업간의 의견교환, 교류의 장으로서 존속하기를 바란다는 의견이 제시되었습니다.

일본측으로부터 저와 일한경제협회 무라카미(村上) 전무이사로부터 당 위원회가 경제인회의의 전문위원회인 이상, 일본측 사무국은 앞으로도 일한경제협회가 맡아야 하며, 중견중소기업분야에 있어서도 양국 협력관계는 대등한 입장에서 개별기업이 사업을 추진하는 단계에 진입하고 있기 때문에 당 위원회에서는 종래와 같이 기술·무역·투자에 대한 구체적인 알선교류에 역점을 둘 뿐만 아니라 중견중소기업분야의 정책변화, 사업자가 직면하고 있는 과제와 특징적인 동향 소개 등의 기본적 정보의 제공·의견교환에 중점을 두면서 지난번 통합된 산업무역회의와 같이 양국 회원간의 『인식의 공유』를 주안점으로 두어야 한다는 의견을 개진하였습니다.

이어서 양국 위원간의 논의를 거친 결과, 양국간 기업, 조합 등의 단체간의 교류는 긴밀해지고 있고 타 지원기관 등을 통한 교류사업도 많기 때문에 각 업계·기업의 개별알선 교류요구는 이러한 채널을 활용하기로 하였습니다. 한편, 년 1회의 위원회는 사전조사를 실시하여 기본적으로 관심이 높은 정보, 의제에 관한 정보제공, 의견교환을 하는 장으로서 자리매김토록 하고 현 사무국 체제는 그대로 존속하며, 위원의 불일치에 대하여는 저희 전국중소기업단체중앙회 등도 계속 협조하면서 회의의 나아갈 방향, 운영에 대해서도 전반적인 조정 등 개선에 힘쓰

기로 합의하였습니다.

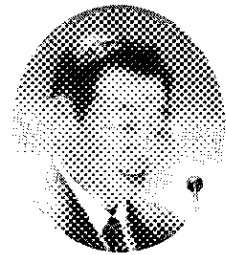
2일째는 산업시설 방문으로 인천시 남동공업단지내의 제영금형정공(주)를 견학 하였던 바, 한국 프라스틱금형 톱메이커인 동시에 중견중소기업의 선도자적 존재 인 동사의 높은 품질관리와 자본장비 수준, 공격적인 사업확대 및 종업원 활성화 시책 등 성장과 확대를 계속하는 한국중소기업의 가장 모범적인 사례를 접할 수 있었습니다.

이번 회의시의 합의에 근거, 당 위원회의 성격을 기본적 정보제공, 의견교환에 중점을 두는 교류의 장으로서 사전준비, 조정 등 상황에 대처하여 위원회의 나아갈 방향을 재점검하면서 향후 더욱 견실하게 진행시켜갈 생각입니다.

마지막으로 출석하신 양국 위원 모두에 다시 한번 감사말씀을 올리며, 중견중소기업위원회 합동회의 경과보고를 마치겠습니다.

감사합니다.

韓日・日韓中堅經濟人交流促進團 報告



韓日中堅經濟人交流促進團

韓國側 團長 薛元鳳

방금 소개받은 한일·일한중견경제인교류촉진단 한국측 단장을 맞고 있는 薛元鳳입니다. 일본측 아소(麻生 泰) 단장님께서 피치 못할 사정으로 인하여, 오늘 저녁 리셉션 시간부터 참석하신다고 하기에 아소 단장님을 대신하여 보고 드리겠습니다.

먼저, 본 교류단의 지금까지의 경과에 대하여 간단하게 살펴보고자 합니다.

본 사업은 1989년 10월을 제1회로 시작하여 제9회까지 매년 가을 한국측에서 6차례, 일본측에서 3차례 상호 방문을 해왔습니다. 그 동안의 활동내용은 TOP경영인 강연, 경제문제 전문가들에 의한 경제 세미나, 패널 디스커션, 각종 산업시설 견학 등을 통하여 일본과 한국에 대한 이해를 심화시키는 연수회적 색채가 강했습니다.

그 이후, 1998년 10월 金大中 대통령의 방일 당시 발표된 한일공동선언 「21세기를 향한 파트너십」 행동계획에 담긴 내용에서, 본 중견경제인교류사업의 그동안의 실적과 성과를 평가하며, 보다 더 이것이 확대되길 바란다고 하는 양국 정부의 기대가 표명됨에 따라, 종래와는 크게 양상이 달라져 새로운 양국의 동반자관계 구축에 있어서 일익을 담당할 민간 사업으로서 명확하게 그 존재와 역할이

양국 정부에 의하여 확인 받게 된 것입니다.

이러한 배경 하에서, 1999년 4월에 열린 「제31회 한일·일한 경제인회의」에서 일본측 아소 단장께서 제안하신 후쿠오카에서의 개최가 합의됨에 따라, 1999년 11월 4일부터 6일까지 후쿠오카 SRP센터빌딩에서 일본측 40명, 한국측 35명이 참가한 가운데 「제10회 한일·일한중견경제인교류추진단 후쿠오카 회의」를 개최하였습니다. 본 회의는 두 개의 세션으로 구성된 교류회의와 리셉션, 견학, 친목파티, 옵션 프로그램이 설정되어 한국과 일본의 새로운 관계 도래에 걸맞게 이전보다 더욱 충실한 정보교환과 솔직한 토론이 이루어져, 인적교류 및 상호이해가 더 한층 촉진됨으로써 예전에 찾아볼 수 없는 성공을 거둘 수가 있었습니다.

그리고, 10회 회의에 있어서는 현지 사단법인 큐슈·야마구치경제연합회의 절대적인 지원과 협력을 받았고, 또한 재단법인 일한산업기술협력재단이 일본측 주최단체로 참여하게 되었습니다. 1992년 발족된 일한산업기술협력재단은 그 활동이 확대됨으로써 사단법인 일한경제협회의 활동과 더욱 밀접해지고 있어, 그야말로 영역을 초월한(borderless) 연계가 이루어지고 있습니다. 따라서, 10회 회의부터 일본측은 일한경제협회와 일한산업기술협력재단이 공동으로 개최하게 된 것입니다.

그러면, 후쿠오카 회의 내용에 대하여 보고 드리겠습니다.

회의 첫날인 11월 4일 교류회의 제 1세션에서는 일본측 2명, 한국측 1명의 강사분들이 강연을 하였습니다.

일본측 첫 번째 강사이신 하야시 카즈노부(林 一信) 큐슈국제대학 국제상학부 학장님께서 「玄海經濟圈 형성을 향하여」라는 주제 하에 경제교류를 중심으로 강연을 하였으며, 한일 양국이 진정한 의미의 교류를 위해서는 서로 「외국인」이라는 점을 인식하고서 보다 서로를 깊이 아는 것이 중요하며, 양국이 서로 안이한 기대나 감정론을 배제한 접근방법을 모색해야 한다고 지적하셨습니다.

일본측 두 번째 강사이신 유화준(兪華濬) 현해인클럽 대표는 「玄海經濟圈 형성을 향하여」라는 주제로 문화 및 지역간 교류에 초점을 맞춰 강연을 하였으며, 큐슈·한국 두 지역 사람들이 「玄海人」으로서 현해탄을 사이에 두고 있는 지역을 단일 지역으로서 공유한다고 하는 발상에 입각하여, 지역교류와 경제교류를 펼침으로써 두 지역이 공존하고 함께 발전할 수 있는 길을 추구해야 할 것이라고

말씀하셨습니다.

한국측 강사이신 박수영(朴秀永) 선문대학교 교수님은 「한일 지역권 교류의 새로운 지평」이라는 테마로 강연을 하셨는데, 한일 양국 모두 경제발전에 따라 시민의식이 고양되어 異文化에 대한 이해도가 높아졌다. 성숙된 시민의식에 입각한 시민·민간단체에 의한 지역교류가 양국의 새로운 교류와 협력의 발판이 될 것이다, 이를 위해서는 정부와 정책보다는 민간·개인의 지혜를 활용하는 것이 중요하며, 양국은 자유경쟁·규제완화를 통한 시장원리의 준수, 지방·민간·개인의 창의에 기초한 분권주의·시민주의에 입각하여 경제교류를 추진해 가는 것이 중요하다고 지적하셨습니다.

이처럼 한일 두 나라 강사분들이 양국의 지역간 교류의 추이와 앞으로 나아갈 방향에 대하여 풍부한 식견을 바탕으로 많은 자극을 받을 수 있는 말씀을 해주셨습니다.

다음 날 11월 5일 오전에 열린 제 2세션에서는 전날 제 1세션을 바탕으로 참가자들의 자유토론이 진행되었습니다.

주요 발언으로서는,

- ◇ 더 한층 스피드가 요구되는 기업활동에 있어서, 종합상사 입장에서는 큐슈지사의 지역에 밀착된 역할이 가일층 중요해지고 있다는 의견
- ◇ 자동차 업체의 큐슈 현지법인의 역할과 활동에 대하여, 현지법인의 자동차 생산과 부품 조달 현황에 관한 구체적인 수치를 덧붙인 현황 설명
- ◇ 정보분야에서 일본기업과 한국기업이 새로운 소프트웨어를 공동개발하여 제 3국에서 공동 비즈니스를 펼치면 어떨까? 중소기업간 정보 네트워크 구축을 통하여 함께 비즈니스 찬스를 확대할 수 있지 않을까라는 제안
- ◇ 水洗 金具(쇠장식)·수도관련 부품에 있어서의 일본기업과 한국기업의 제휴 사례를 들면서, 한국의 제품규격이 세계 규격에 합치되며, 일본보다 훨씬 한국이 앞서가고 있다. 이 분야의 일본측 행정규제가 일본을 세계기준에 뒤처지게 만들고 있다는 지적
- ◇ 본 교류사업이 형식주의적이고 매너리즘에 빠지지 않도록 하기 위해서라도, 예를 들면 정보 소프트 분야라든지 환경분야 기술의 공동개발, 기술 공유화를 통한 제 3국에서의 공동 비즈니스 모색 등 본 교류사업에서 새로운 테마를 추구해야 한다는 의견

등등 실제 비즈니스 체험에 기초한 구체적인 의견, 현지 큐슈만이 가질 수 있는

독특한 시각을 바탕으로 한 발언 등, 솔직하고 내실 있는 토론이 활발하게 진행되었습니다.

11월 5일 오후에 있었던 견학은 키타큐슈시의 하비키나다(響灘)지구에 있는 페트병, OA기기 리사이클 회사 등 환경·리사이클 시설을 견학하였습니다. 일본에서도 가장 앞서가고 있는 환경·리사이클 시설을 직접 살펴보면서 참가자 모두 커다란 관심과 신선한 자극을 받을 수가 있었습니다.

견학 일정을 마친 저녁에는 아소 단장님의 배려로 이즈카(飯塚)시에 있는 아소 본가·아소 시멘트(주) 「오우라소(大浦莊)」에서 열린 친목파티에 약 70명에 달하는 참가자들을 초대해 주신 덕분에, 더욱 활기 띠고 알찬 교류가 이루어졌습니다.

이로써 「제10회 한일·일한중견경제인교류촉진단 후쿠오카 회의」는 참가자 전원이 잊지 못할 充實感을 얻었으며, 전례에 찾아 볼 수 없을 정도로 성공리에 끝났습니다.

앞으로 본 사업은 가일층 교류를 촉진·심화시키기 위하여, 후쿠오카에서 아소 단장님이 말씀하신 바와 같이 본 교류사업이 형식적이고 매너리즘에 빠지지 않도록, 시대를 내다보는 신선한 테마를 모색해 나가고자 합니다.

이상으로 「제10회 한일·일한중견경제인교류촉진단 후쿠오카 회의」에 대한 보고를 마치겠습니다. 경청해 주셔서 감사합니다.

第 1 分 科 會

(새로운 韓日 協力)

〈코디네이터〉

韓國側：金 正 (株)HANWHA流通 代表理事

日本側：麻生 泰 麻生시멘트(株) 社長

〈第 1 分科會〉

(日本側 백그라운드 페이지)

日韓 Business alliance의 展望과 課題



野村 綜合 研究所
主席研究員 椎野 謙次

노무라종합연구소에 근무하는 시이노라고 합니다. 오늘 이 회의에서 한일 양국의 새로운 비즈니스 얼라이언스에 대한 백그라운드 페이지를 보고 드리게 된 것을 대단히 영광스럽게 생각합니다. 한국이 최근 들어 많은 관심을 보이고 있는 영역인 부품·재료산업을 염두에 두면서 ① 한일기업간의 비즈니스 얼라이언스가 필요한 시대에 이르게 된 배경, ② 부품산업 등에서는 어떤 얼라이언스가 가능한가, ③ 일본측이 생각하는, 얼라이언스의 가속화에 따른 한국의 과제는 무엇인가, 이 세 가지 사항에 대해 말씀드리겠습니다.

얼라이언스는 한자어로는 동맹이나 제휴 등으로 표현되는 복수주체간의 관계를 뜻하는 말로, 기업경영분야에서는, 상호간의 대등성을 바탕으로 특정한 목표와 리스크를 공유하며, 경영자원의 상호교류시스템이 구축되어 있는 관계라고 이해하시면 되겠습니다. 일본기업은 최근 1년간 「자국우선주의적 경영 혹은 단독형 경영」에서 「얼라이언스전략경영」으로 방향을 크게 틀은 것이라 볼 수 있습니다. 국제경쟁 속에서 살아남아 시장이 요구하는 새로운 기업경영평가축에 대한 대응, 자원의 효율화, IT등 신분야에 대한 도전 등이 그 배경이 되고 있음은 세삼 설명드릴 필요가 없을 것입니다.

개별기업차원으로서는 국경을 초월한 얼라이언스전략을 포괄하는 개념으로, 아울러 산업차원에서는 한일간의 지금까지의 역사적 관계를 바탕으로, 향후의 한일간의 산업관계를 「공창(共創)의 시대」라고 표현해 보았습니다. 한일 양국이 「함께 만들어나가는 시대」, 한자로는 한일양국이 「공동」으로 「창조」한다는 뜻으로 「共創」이라는 표현이 좋지 않을까라는 생각을 했습니다만, 이 「共創의 시대」를 만들어갈 수 있을 것인가가 오늘 제 말씀의 주제가 되겠습니다. 물론 산업·기업차원에서 말씀드리는 것입니다.

한일 양국의 산업관계를 돌이켜보면, 60년대에는 양국간의 산업력에 절대적 격차가 있었으며, 한국이 일본에게 의존하던 시대였습니다. 70년대는 한국이 일본에서 자본과 기술을 도입하던 시대 - 즉 상호협력관계가 시작되던 때였습니다. 80년대는 양국 모두 경제력이 비약적으로 발전한 시대이며 상호협력에 따른 성장의 시대였습니다. 많은 일본기업들이 한국에 진출했습니다. 90년대에 들어서 일본은 오랜 침체를 겪었고 한국은 97년 말에 경제위기가 닥치기까지 고성장을 계속했는데 그간의 한일산업관계를 요약해보면 「경합과 그 激化」의 시대라 할 수 있을 것입니다.

이러한 역사를 거쳐 향후 10년 동안 「共創의 시대」를 만들 수 있을 것인가가 문제인 것입니다. 저는 산업협력비전에 대한 양국의 충분한 토론의 장 같은 것을 거침으로써 「共創」의 시대, 새로운 한일 비즈니스 얼라이언스를 이룩할 수 있을 것으로 보고 있습니다.

먼저 「진정한 파트너」가 될 것이라는 양국 정부의 의지가 확고합니다. 그리고 세계의 산업이 국경을 초월한 대폭적인 제편성시대를 맞이하고 있으며, 한일 양국의 기업도 그 흐름의 한가운데에 있습니다. 더욱이 한국은 국제경쟁력의 면에서 사업도메인이나 노사시스템 등에 대한 역사적이고도 대담한 구조개혁을 진행중에 있습니다. 일본에서도 사업도메인의 정리와 고용시스템은 물론 얼라이언스전략의 본격적인 도입, 부품·재료의 인터넷을 통한 조달이나 판매망의 전산화로의 이행이 시작되는 등 기업경영방식이나 경영·노동 등에 대한 가치관이 사원과 사회를 포함하여 크게 변화하기 시작했습니다. 사업의 인프라로는 IT에 대표되는 기술혁신과 그 보급의 가속화, 그에 따른 새로운 사업의 기회가 잇따라 만들어지고 있습니다. 이렇게 보면 산업이나 기업경영차원에서의 새로운 한일관계의 구축을 위해 오늘날 만한 조건이 갖추어진 때는 양국의 역사상 없었던 것으로 생각됩니다.

한일 「共創」의 시대를 구축하기 위한 조건을 미시경제적으로 보더라도 몇 가지의 호조건을 찾을 수 있을 것입니다. 그 예로 한국의 제조업계는 품질 면에서

아직 문제가 없는 것은 아니지만 최근 획기적으로 개선되고 있습니다. 모 사무기기 메이커는 10년에 걸친 부품 등에 대한 품질개선노력 끝에 작년 세계로 수출할 수 있는 품질인증을 미국의 본사로부터 받아내 중국·일본에 대한 특정모텔의 수출을 시작했습니다. 한국의 공산품 시장도 '99년 6월의 수입선다변화품목제도의 전면철폐」로 일본기업의 가일층의 관심을 유도하고 있습니다. 한국의 다양한 서비스업에 대한 선진국 노하우의 제공, 한 예로 옆에서 열리고 있는 분과위원회의 주제인 환경기구나 엔지니어링도 한일 양국에게 중요한 비즈니스찬스가 될 수 있습니다.

역으로 일본도 한국기업에게 큰 비즈니스찬스를 제공하기 시작했습니다. 일본기업의 부품·원자재 등의 외부조달처가 크게 변화하고 있음을 그 예로 들 수 있습니다. 汎用基準品을 시작으로 지금까지 거래가 없었던 기업에게도 판매 기회가 급속도로 열리고 있습니다. 인터넷의 보급이 그 중요한 도구가 되고 있습니다. 일본기업의 사업도메인의 선별작업은 기술력을 갖춘 한국·대만기업 등에 대한 위탁생산 혹은 특정모텔의 OEM을 증가시킬 것으로 보입니다. 이미 한국의 인터넷개열의 벤처기업이나 대기업이, 일본과 제휴하기 위해 빈번히 접촉하여 그 길을 모색하기 시작했습니다. 한국에 비해 경제규모가 큰 일본시장은 기술력이 있는 한국기업들에게 상당히 매력 있는 시장일 것입니다.

이렇게 거시적으로나 미시적으로나 「韓日共創」을 위한 기반은 종래 없는 호조건이라 생각됩니다. 조건이 갖추어져 있다면 그럼 그 다음은 개별산업·제품차원에서 급속도로 확산될 수 있을 지에 관심이 모아지게 됩니다.

구체적인 차원 즉 브레이크다운된 산업·제품에 관한 것을 다루기 위해서는 韓日共創의 가능성을 보다 미시적으로 조사함으로써 얼라이언스가 양국에 가져다주는 이점을 찾아내어 양측의 경쟁력 향상에 대한 공헌도를 측정하는 작업 등을 먼저 시작해야만 합니다. 그 이전에도 몇 가지 기초적인 과제도 있습니다. 이러한 과제들에 대해 언급하기 전에 산업차원에서의 한일 얼라이언스와 관련된 제 견해를 약간만 말씀드리고자 합니다.

환경산업에서의 한일 얼라이언스를 예로 들어봅시다. 일본기업은 이미 한국기업과 제휴 혹은 JV(1개사)의 형태로 사업을 진행중에 있다고는 하나, 물처리와 소각의 범용기술이 중심이다 보니, 고도처리시스템과 관련된 엔지니어링과 소프트웨어적인 기술은 향후 얼라이언스가 가능한 분야가 됩니다. 한국측은 일본이 파이프낸스와 기본기술을 맡고 한국이 설계와 영업 및メンテナンス사업을 담당하는 분담스킴을 기대하고 있습니다. 일본기업과의 이해조정을 이 스킴에서 실현시킬

수 있을 것인지, 그리고 중국·아시아에 적합한 저코스트환경시스템에 대한 한일 공동사업개발을 구체적으로 어떻게 추진할 것인지가 양국의 경제합리면에서의 최대과제일 것입니다. 또한 아시아의 환경개선과 저코스트시스템의 개발에 대해 양국정부가 어떻게 지원할 수 있는가, 혹은 일본의 지방자치단체 시장개방에 일본측이 어떻게 대처할 것인가 등의 문제를 고려할 때, 개별기업의 틀을 넘어선 한일 얼라이언스의 프레임구축을 지원할 필요가 있다고 말씀드릴 수 있습니다.

부품산업에서는 어떨까요. 부품의 종류에 따라 혹은 그 모체 산업에 따라 많이 달라질 것이라 생각됩니다. 예를 들어 자동차부품에서는 한국은 수출모델의 수입부품을 제외하면 국산화율이 90% 이상이라고 합니다. 앞으로 한일 얼라이언스는 한국 기계계통부품의 하청업체나 카일렉트로닉스메이커의 기술개발력 향상, 코스트절감을 위한 소량생산자동화기술, 불량률 감소를 위한 생산프로세스노하우의 입수 등에서 한국측의 니즈가 발생할 것입니다. 일본측은 전반적으로 소극적입니다. 생산기술에 대한 로열티에 대한 가치인식이 한국측과 일치하지 않은 데다, 기본기술을 일단 습득하고 나면 지속적인 관계 유지에 소극적인 자세를 보이기 쉬운 한국측의 성향 등이 그 주요 원인입니다. 자동차부품은 오히려 일본이 기술수출을 하는 것이 아니라, 한국부품의 품질향상으로, 가까운 장래에는 일본이 한국으로부터 부품수입을 하는 방향으로 가지 않을까 하는 생각입니다. 자동차부품분야에서 전형적으로 드러나듯이 대부분의 일본의 부품산업은 전략적인 코스트절감 없이는 생존할 수 없는 시대가 되어 있습니다. 상당한 경쟁력을 갖춘 한국 부품기업과의 얼라이언스는 양측의 경제합리성을 충족시킬 수 있을 것이라 생각됩니다.

부품산업을 중심으로 한 한국과 일본간의 로컬 투 로컬(local to local)의 얼라이언스에 대해서는 어떻게 생각해야 할까요. 부품관련중소기업의 집적지의 하나인 도쿄도(東京都) 오타구(大田區)소재기업의 한국에 대한 관심도를 KOTRA가 최근에 조사한 바 있습니다. 한국에 어느 정도 관심을 가지고 있는 기업이 조사에 응했을 것이라는 편중성을 감안하더라도 그 조사에 따르면 상당수의 중소기업이 이미 한국과 거래하고 있으며, 한국에 대해 새롭게 관심을 가지고 있는 기업도 적지 않습니다. 한국을 일본의 부품수출시장으로 또 OEM위탁생산처로 혹은 기술수출처로, 부품조달처로 삼는 등의 다양한 얼라이언스의 진전을 볼 수 있을 것이라는 전망을 이 조사결과를 제시하고 있습니다.

부품산업의 한일 얼라이언스는, 로컬 대 로컬로 정부가 특정지역을 우선적으로 지원하여 민간이 시장원리에 따라 추진해가는 형태로 가속화시킬 수 있을 것입니다. 大田區는 고도가공부품과 시제품공장의 집적지로도 유명합니다. 한국과의

로컬·얼라이언스가 집적지 단위로 진전이 된다면 그것은 R&D기지로서의 한국의 발전에도 이어지지 않을까요.

한일간의 향후의 비즈니스 얼라이언스의 진전에 관해 두 가지를 더 말씀드리고자 합니다. 하나는 벤처캐피탈 등에 의한 對日投資, 對韓投資가 예상된다는 것입니다. 對日投資는 한국의 대기업이나 벤처가 준비·계획중이라 들었고, 일본의 對韓投資는 소프트웨어·인터넷관련기업이나 벤처캐피탈이 이미 시작하고 있음은 여러분 모두 잘 아실 것이라 믿습니다. 정보통신분야가 그 전인분야라 할 수 있을 것입니다.

또 하나의 새로운 형태의 얼라이언스의 흐름은 일본, 한국, 중국의 산업링크지(연계)의 시작으로 인한 것이라 예상됩니다. 시장의 매력도와 높은 코스트우위성을 가진 중국을 포함하여 동북아시아지역에서의 얼라이언스로 인한 경쟁력 강화를 모색하고자 하는 것입니다. 당사도 올해 3국간의 산업링크지의 가능성에 대한 기초연구를 시작했습니다. 일·한·중의 3국이 자본, 기술, 코스트, 입지, 시장 등을 어떻게 잘 조화시켜 국제적 우위성을 발휘할 수 있을 것인가에 대한 전략프레임의 구축이, 한일기업에게 중요한 문제가 되지 않을까 생각합니다. 또한 중국의 경제적인 영향력의 증대뿐만 아니라 남북관계의 변화나 일본의 북한과의 관계개선 등의 향후의 정치적 변화가 산업·기업면에서의 전략변화를 초래할 것이라는 점도 충분히 예상할 수 있으며, 향후 10년의 동북아시아지역의 변화는 기업경영면에도 영향을 미칠 것이라 생각합니다.

이상 간단히 말씀드린 바와 같이 한일간의 얼라이언스는 최근 수년간 새로운 시대를 맞이할 것으로 생각되지만, 「오래되었으면서 오늘날에도 맞는」 과제도 있습니다. 여기서는 일본측에서 본 몇 가지를 지적해보고자 합니다.

하나는 한일 얼라이언스를 구체적으로 가속화시키기 위해 중요한 검토자료, 특히 일본의 중소기업, 부품업체가 한국에 접근할 경우의 자료가 될, 믿음만한 한국의 산업·시장정보가 상당히 부족하다는 점입니다. KOTRA의 大田區의 중소기업조사에서도, 한국기업 내지는 한국시장과의 거래를 새로 고려함에 있어 먼저 직면하게 되는 최대의 난관이, 한국의 구체적인 실태를 알 수 없다는 것입니다. 브레이크다운된 산업·시장차원의 기초정보를 한국측에서는 더 제공해야만 합니다. 또한 한국진출의 성패의 50%는 파트너가 좌우하기 때문에 일반거래도 포함해서 기업정보면에서는 투명하고 신뢰성 높은 정보공개를 할 필요가 있습니다.

두 번째 과제는 지적재산권의 문제입니다. 이미 양국정부간에 개혁검토가 진

행되고 있습니다만, 중소기업도 포함해서 한국의 민간기업경영자의, 현실에 기초한 기본적인 의식이 근본적으로 개혁되어야 할 필요가 있습니다. 당사가 한일간의 기술이전 30개 안전 - 일본기업 100개사에 대한 시도 과정에서 겪은 일본측의 이 문제에 대한 불만과 불신의 정도를 표로 정리해서 첨부하였으니 참고해주시기 바랍니다. 앞서 언급한 大田區조사에서도 상당수의 중소기업이 제품과 기술의 불법복사문제로 인해 한국과의 얼라이언스를 거부하는 상황을 볼 수 있습니다. 외자유치에 대한 인센티브나 외자를 겨냥한 공업단지의 조성과 같은 시책보다는 한국기업의 지적재산권에 대한 의식개혁이, 보다 신뢰할 수 있는 양국기업관계의 구축에 기여할 것이라는 것을, 많은 일본기업의 솔직한 생각을 접하며 저는 느꼈습니다. 일본기업을 방문하여 샘플을 가지고 와서 그대로 카피해 수출함으로써 일본기업과 경쟁하는 것이 아니라, 독자적인 기술로 만든 샘플을 일본으로 가지고 가서 판매활동을 벌이고 소비자의 지적을 받아가며 기술을 개선해야 할 때라 봅니다. 코스트면에서도 많은 부품 등에서 한국은 일본보다 유리하기 때문에 중요한 것은 품질이라고 말씀드릴 수 있을 것입니다.

그래서 세 번째 과제로 품질문제를 들고 싶습니다. 이미 한일간의 많은 자리에서 논의가 이루어졌던 과제이기도 하고 의견도 나올 대로 다 나온 그런 과제라고도 할 수 있습니다. 한국제품의 품질은 최근 몇 년간 꾸준히 향상되어 일본시장에서 유명해진 컴퓨터의 하드웨어도 나왔습니다. 하지만 많은 양과 종류의 한국제 부품을 일본기업이 구입하게 되려면, 한국은 제품생산에 아직도 많은 노력을 기울여야 합니다. 기계부품으로는 가공기술관련, 전자부품으로는 품질안정성에 특히 문제가 있는 것 같습니다. 일본의 중소기업에서도 코스트경쟁력을 유지하기 위해 한국제 부품의 구입과 위탁생산의 니즈가 적지 않습니다. 품질과 공급안정성이 관건입니다.

마지막 과제로서 한 가지만 더 말씀드리고자 합니다. 한국의 강점의 명확화와 그 PR에 관한 것입니다. 한국에서의 부품구입이나 OEM위탁생산으로 인한 코스트절감을 제외하고, 직접투자로 단순히 저비용화를 지향하는 시대는 일반적으로는 지났다고 봅니다. 한편 한국에게는 풍부한 고학력노동력, 환경변화에 대한 놀라운 적응력, 매니지먼트의 재빠른 의사결정, 벤처기업의 융성에서 전형적으로 볼 수 있는 왕성한 기업가정신과 집중적인 에너지 투입, 미국식의 합리적인 매니지먼트스타일로의 발빠른 전환 등의 강점이 있습니다. 하이스피드경영을 지향하는 이 시대에 커다란 무기가 아닐 수 없습니다. 한국이 IT산업의 소프트개발이나 어플리케이션창조에서 상당히 뛰어난 힘을 발휘한다는 사실도 한국에 체류하는 일본인 사이에서 알려지기 시작했습니다. 어떤 상황이나 산업에서 무엇이 한국의 강점이 될 수 있는지가 일본에게 명확하게 전달되었다고는 볼 수 없습니다.

한일협력의 비즈니스모델로 무엇이 강점인지를 명확히 하이 PR할 때라고 생각합니다.

이상 일본측에서 본 몇 가지 과제에 대해서 말씀드렸습니다. 역으로 한국측에서도 일본의 과제가 별도로 지적될 것입니다.

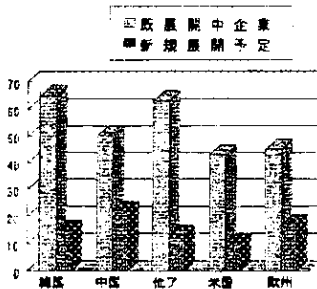
양측의 과제를 나열하면 끝이 없겠습니다만, 제가 처음에 말씀드렸다시피 지금 역사적으로도 새로운 한일 얼라이언스를 위한 조건이 상당부분 갖추어진 것도 사실입니다. 이 조건과 기회를 놓치지 않고 앞으로 구체적인 목표와 방안이 포함된 산업협력비전이 작성되어 한일관계의 새로운 패러다임 구축에 기여할 것을 기대하면서 제 보고를 마치겠습니다.

한국의 기술도입 희망과 일본기업의 반응

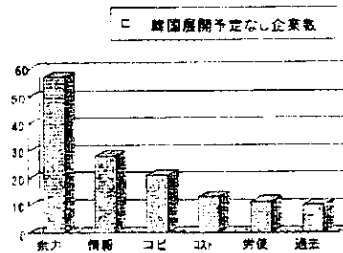
- 한국 약 30건의 도입희망의향서에 따른 일본 100개사에 대한 1차 접촉
 - 한국기업의 니즈를 우선으로 한 안전추출
 - 기술도입과 그 효용(: 합리적 가격)
 - 도입에 대한 "진지함"
- 70%는 부품·기기·재료와 그 생산기술 (30%는 최종제품)
 - 수건의 "니즈·시즈매칭"
(ex : 키스위치, 영아용음료생산, 주불소재)
 - 대부분은 "어려움"

① 일본측 이득이 불투명	20	30%
② 예전에 거래, 협상경험 있음 (이득이 별로 없음, 협상과정에서의 불신)	40	
③ 불명확, 여유없음	20	
④ 로얄티수준이 크게 불일치, 지적재산권에 대한 불안	50	
⑤ 한국이 아니라도 진출의사가 없다		70%

大田區중소기업의 한국사업



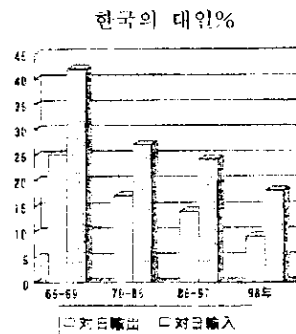
주1 : 「他7」는 한국·중국 외의 아시아
 주2 : 응답기업 합계198개사
 주3 : 전개사업은 수출·부품 등 수입, 합병,
 기술제휴, 위탁가공 기타



주 : 「능력」은 해외전개의 능력 없음
 : 「정보」는 부품산업정보 등이 없음
 : 「카피」는 제품기술카피의 우려
 : 「코스트」는 높은 생산코스트
 : 「노사」는 빈번한 노사분규에 대한 불안
 : 「과거」는 과거 한국기업과의 거래실패경험

한국에서의 일본의 위상 (직접투자·수출입)

- 대한투자의 일본비율
 - 62~86 52%
 - 87~89 48
 - 90~95 24
 - 96 8
 - 97 4
 - 98 6
 - 99 11
 - 62~98 19
 - 미국 = 34, 유럽 = 30
- 한국의 대일투자자는 1%



〈第 1 分科會〉

(韓國側 백그라운드 페이지)

Internet을 활용한 韓日 兩國 企業間 協力



韓國通信 FREETEL(株)
社長 李 容 璟

I. 서 론

한국과 일본은 90년대 중반 이후 지금까지 경제위기의 터널을 지나오면서 기존 산업구조에 대한 반성과 더불어 새로운 산업구조로의 변환을 모색하고 있습니다. 이와 더불어 20세기와 21세기를 잇는 화두인 Internet의 발달은 양국 기업간 협력의 paradigm에도 변화의 기회를 제공하고 있습니다.

이러한 시대적 배경에 즈음하여 한일 경제인 회의를 통해 양국간 기업 협력방안을 모색하는 것은 매우 의미 있는 일이라고 할 수 있겠으며, 주제 발표를 맡은 저로서도 큰 부담감을 느낍니다.

이 시간을 통해서 간략하게나마 살펴볼 내용은 다음과 같습니다.

우선 기존 한일 양국간 기업협력의 양상을 개괄적으로 살펴보도록 하겠습니다. 다음으로는 최근에 일어나고 있는 인터넷을 활용한 기업협력의 경향을 살펴보고, 이러한 움직임이 한일 양국간 기업 관계에는 어떻게 적용될 수 있을 지에 대한 문제제기로 주제발표를 갈음하고자 합니다.